

令和4年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金  
老人保健健康増進等事業

若い世代(学生等)のための  
これからの高齢者生活支援マニュアル  
～生活支援コーディネーター、教育機関教員のみなさま必携～

学校法人京都橘学園  
令和5(2023)年3月

## 目次

1. はじめに.....	1
1)このマニュアルを手にとっただいた方へ.....	2
2)若い世代(学生等)による高齢者の困りごと支援は、若者・高齢者の 相互関係構築の一步.....	4
2. 若い世代(学生等)を理解する.....	7
1)令和の若い世代(学生等)の特徴.....	7
2)若い世代(学生等)が持つ力.....	9
3. 高齢者を理解する.....	10
1)高齢者の特徴.....	10
2)人との関わりが高齢者の健康や幸福に与える影響.....	13
3)高齢者が考える「若者像」.....	14
4)高齢者とのコミュニケーション.....	16
5)高齢者と接する時の若い世代(学生等)のマナー.....	17
4. 生活支援コーディネーターを理解する.....	20
1)生活支援体制整備事業と生活支援コーディネーター.....	20
2)生活支援コーディネーターの役割・視点等.....	21
5. 大学が世代間交流や高齢者の生活支援に参加する際の留意点 .....	24
1)若い世代(学生等)の活動を支える環境づくり.....	28
2)若い世代(学生等)を探し、高齢者との交流・生活支援を動機づ ける.....	32
3)若い世代(学生等)の主体性を引き出す.....	34
4)若い世代(学生等)が活動を始める時のコツ.....	37
5)若い世代(学生等)と高齢者のマッチングのコツ.....	38

6)支援を成功させるコツ .....	41
7)活動を継続するためのコツ .....	44
7. 参考 .....	47
1)京都橘大学の今までの高齢者支援の取り組み紹介 .....	47
【1】高齢者と若い世代(学生等)とのコミュニケーション - 健康 科学部授業「医学概論」での取り組み- .....	57
【2】高齢者の日常生活支援ニーズの把握 - 看護学科1.3年生に よる取り組み- .....	62
【3】山間部地域の高齢者支援:学生主体の高齢者健康調査の取 り組み -健康科学部理学療法学科 3 年生の取り組み- .....	66
【4】高齢者と若い世代の交流のあり方 - 物作り、体操、食品ロ ス問題、就労的活動などを通して- .....	72
【5】高齢者の創造性を刺激する -ものづくり教室を通じた高齢 者と作業療法学科3.4年生の世代間交流- .....	76
全国の若い世代(学生等)による高齢者新の取り組み紹介 ...	80
3)生活支援コーディネーター、社会福祉協議会等の情報 .....	91
8. おわりに .....	93

## 1. はじめに

このマニュアルは令和4年度厚生労働省老人保健健康増進等事業の一環として作成したものです。事業の課題は、若い世代（学生等）による高齢者の生活支援に関する調査研究です。具体的には若い世代が日常生活、学生生活、課外活動等を通じて、高齢者に対する生活支援に関わる取り組みに積極的に参画するようになるにはどうしたらよいかを調べ、提案するための事業です。

高齢者の生活支援の問題は、地域コミュニティの問題でもあります。若い世代が地域の活動にさかんに参加できるようになることは、地域のうるおいにつながり、ひいては高齢者の生活にもうるおいをもたらします。このマニュアルの作成にあたって、地域の問題は重要な要因のひとつです。マニュアルでは、地域性を重視するとともに、地域が異なっても、若い世代が、無理なく持続的に参加できる要因を明らかにすることをめざしました。

若い世代の大きな特徴は、成長しつつある者、学びつつある者であるというところにあります。これは、大学等の学校に通っているかどうかにかかわらず。そこでこのマニュアルでは、このような若い世代の参画を促す要因として、教育とのかかわりもまた重視しました。このマニュアルの活用により若い世代（学生等）の参加が促進され、高齢者との望ましい世代間交流につながることが望めます。さらには、高齢者の社会参加が促進されることで、地域コミュニティが活性化され、継続的で実質的な高齢者の生活支援につながることを期待されます。

## 1)このマニュアルを手にとっただいた方へ

—あらゆる方に関心をもっていただくために—

このマニュアルは、個々の研究成果をまとめたものとして作成しました。高齢者の生活支援に若い世代（学生等）の参加を促進する「マニュアル」の案として提案するものです。当初は若い世代（学生等）に向けたマニュアルを想定していましたが、研究遂行の過程で、生活支援に関係・ご協力いただく方々へのメッセージも重要であるとの見解に到達したため対象を拡大しました。特に、地域における高齢者の生活支援体制の充実は、生活支援コーディネーターの役割が大きいことから、生活支援コーディネーターの皆さんには是非、このマニュアルを活用いただければと考えます。同時に、大学教員は学生の参加を促す意味で役割が大きく、このことは学生自身の成長にも重要な意味をもつことから、大学教員にも活用いただくことを考えました。

しかし一方、このマニュアルで扱う若い世代（学生等）の参加は、教育という視点だけでなく、介護からみれば介護保険外サービスという視点もあります。介護や医療の関係者にもご覧いただきたいのはもとより、若い世代（学生等）自身にも、このマニュアルを参考に、世代間交流の一步を自身で進めていただければと考えるようになりました。若い世代（学生等）が、むしろ今後、仕掛人となって、課外のボランティア活動として、あるいは起業のためのビジネスとして、もしくは、自分の将来の糧として、参加を推進していただければ、このマニュアルの意味は大きなもの

になります。

国際的には高齢者の孤立や、それに対する世代間交流への社会的関心は近年、とても高まっています。しかし、わが国では認知度が低く、大きなギャップがあります。支援を利用する立場の高齢者の方々、さらには、一般のあらゆる方々にこのマニュアルを手にとっていただき、高齢者の生活支援や世代間交流の事業に、関心をもっていただけることを願ってやみません。

(事業担当者の一人として：平出敦)

## 2)若い世代(学生等)による高齢者の困りごと支援は、若者・高齢者の互恵関係構築の一步

京都橘大学 看護学部看護学科 松本賢哉

高齢者の日常生活における困りごとは、それが加齢による自然な現象であっても、高齢者をネガティブな思考にさせてしまいます。困りごと自体を「恥ずかしいことだ」、「情けないことだ」、「他者に迷惑をかける」と隠したり我慢しがちです。

一方、若い世代（学生等）を取り巻く環境はスマート化、便利化、低ストレス社会の流れに伴い、生活力やコミュニケーション力を高める場面が極端に減っています。そのため、現在大学生を中心とした若い世代（学生等）への教育では生きる力やコミュニケーション力を高めるための内容が教養科目等に位置付けられています。

**この二つの現象は高齢者と若い世代（学生等）にとって、とてもいい関係性と化学反応を生み出してくれます。**なぜなら、若い世代（学生等）の生活力を高める点においては、高齢者への生活支援を通して学ぶことが多いからです。高齢者の身体的特性や生活の工夫や知恵などが学べるほか、他者に感謝される喜び、自己の存在の認識など、若い世代（学生等）の存在意義やアイデンティティーの形成にも役立ちます。

京都橘大学看護学部においては、団地に暮らす高齢者宅へ「生活上の困りごとを解決するお助け隊」をテーマとした実習を10年

近く展開しています。**学生は自分が支援する人として高齢者宅を訪問して活動しますが、実際には高齢者から学ぶことの方が多く**ことに実習終了後に気づきます。自分よりも何倍もの時間を生きてきた高齢者の人生は学生の心を大きく揺さぶります。高齢者の困りごとは多種多様であり、高い場所の電球を交換できない、台所の換気扇が掃除できない、風呂掃除ができない、窓のサッシが掃除できない、粗大ごみを4階から1階まで階段で運べないなどです。若い頃は楽に身体が動き、脚立に登ってもふらつくこともありません。若い世代（学生等）なら何の苦労もなくできる家事が年を取ると思うようにできなくなります。実習で訪れた学生はそんな困りごとを抱える高齢者の生活を実体験として理解できるだけでなく、日常の生活で活用できる様々な能力を身に付けることができます。まさに若い世代（学生等）の生活力を養う場となっています。

**高齢者から学ぶことや高齢者の生活上の困りごとが、若い世代（学生等）の教材になると考えると、「今度来てくれた時に（学生に）仕事を作ってあげよう、暇にさせたらかわいそうだ。」と生活の困りごとは高齢者にとって、ネガティブな老化現象ではなく、ポジティブな働きかけに変化します。**前述した実習においても、最初は学生を受け入れることに消極的だった高齢者も、2回目からはむしろ積極的に受け入れてくれるようになりました。また、若い世代（学生等）にとっては自己の発見や生活力、コミュニケーション力を高めるチャンスとなります。

このように現在ある現象同士をマッチングすることで、価値の転換が創り出されます。さらにそれは、新たな価値の創出となります。だからこそ、日常的にこのような活動を支える触媒的役割を担う人の育成が大切なのです。

**高齢者の生活支援は、若い世代（学生等）が高齢者を支えるという一方向のベクトルで捉えて良いのでしょうか。日常生活の困りごとを助けることだけが生活支援でしょうか。もちろん、そのような側面はあります。しかし、関わり方を工夫するだけで、高齢者と若い世代（学生等）の接点を増やし、お互いの弱みを絡ませることで、まったく異なる有意味な関係性と文化がそこに産まれると考えます。**

## 2. 若い世代(学生等)を理解する

京都橘大学 看護学部看護学科 征矢野あや子

昭和時代に若者だった人々からみると、令和の若い世代（学生等）はなんでもスマートにこなすけれども覇気がないように見えて、何を考えているかわからないと感ずることが多いものです。しかし、若い世代（学生等）がどのように育ってきたかを理解すると、若い世代（学生等）に合わせた関わり方の参考になるかもしれません。

ここでは、地方都市にある総合大学の教員からみた若い世代(学生等)の特徴を解説します。

### 1)令和の若い世代(学生等)の特徴

1990 年代後半から 2010 年代はじめまでに生まれた人は「Z 世代」と呼ばれています。この世代は生まれながらにパソコンやスマートフォンに囲まれて育ちました。情報を得やすい環境にあるため、関心をもったことはすぐ情報収集します。その一方で、疑問を感じたときにすぐ調べることに慣れているので、わからないままの状態はモヤモヤして落ち着かない、正解のない問いが苦手、と感じる人が少なくありません。

また、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）など

の文字のコミュニケーションにおけるトラブル（炎上）を予防するために、伝えたい文章を推敲してから送信することに慣れてしまいました。その結果、昭和・平成時代の若者に比べて、やり直しのきかない「生の会話」をすることにすこし身構えているようです。

インターネットを通じて多様な文化的背景をもつ人々が発信する情報に触れることで、多様な価値観を受け入れる力があります。とはいえ、核家族化がすすみ、高齢者と同居・近居経験のない若い世代(学生等)が増えています。言い換えると、高齢者のことを具体的にはよくわからず、高齢者の生活が想像つかない・接し方に戸惑う若い世代(学生等)が増えています。

家庭、学校、習い事では「ほめて伸ばす」教育を受けた経験が多く、その一方で叱咤激励を受けた経験が少ないようです。また、いじめを回避するために、相手を傷つけないように常に気をつけてコミュニケーションしています。そのため、失敗体験や相手が軽い気持ちで発した強めの言葉に衝撃を受け、「心が折れる」ことがしばしば起こります。そのような時、昭和時代には「心が折れるのはその人の弱さで、乗り越えるべきだ」という社会の価値観がありましたが、現在は、自己肯定感や自信を高めることが大事だと言われています。

昭和時代の大学生は勉強よりも政治的な活動、遊び、アルバイトなどに熱中する人が少なくなかったのですが、令和時代の大学

教育は厳しくなり、授業の出席やレポートなどの課題をサボることが許されません。また、長引く不況により、自宅住まいの学生であっても通学費用、教科書代、昼食代などをアルバイトで賄う学生が増えています。現在の若い世代(学生等)の生活はつつましく、とても忙しいようです。

高齢者に、若い世代(学生等)はこのような特性をもっていることを理解してもらうこと、特性に配慮した穏やかなコミュニケーションをとってもらうことが、交流・生活支援の成功のカギになりそうです。

## 2)若い世代(学生等)が持つ力

別冊の先駆的事例集や京都橘大学での取り組み（参考資料参照）から、若い世代（学生等）が持つ力が見えてきました。

若い世代（学生等）に**社会人としての振る舞いが求められるのは当然のことですが、その一方で不完全という若者らしさが高齢者にとって気楽さや思いやりなどの感情を生み、それが「楽しい」につながっている**ようです。専門性のない「ただの若者」であること自体が魅力になり、高齢者の本音を引き出すことができます。また、若い世代（学生等）には何でも楽しむ力があり、たとえば網戸の修理や雪かきですら、若い世代（学生等）同士が力をあわせて非日常のイベントとして楽しむことができます。そのためには、生活支援コーディネーターや教員によるムード作りやタイミングの良い労いといった仕掛けがあると、より効果が高まります。

### 3. 高齢者を理解する

高齢者は何十年もの人生の中で、定年退職して豊かな収入を失い、健康で万全な身体を失い、親や配偶者など近しい人々を亡くし、様々な喪失体験をしています。若い世代（学生等）からみると大変な経験をしてきました。体験の内容も対処の方法も高齢者一人一人異なるので一概には述べられませんが、高齢者の特徴について解説します。

#### 1) 高齢者の特徴

年を重ねることで見た目や臓器に老化が起こり、また様々な経験を経て物事の感じ方・考え方が変わります。

##### (1) 高齢者のからだ

見えにくさ、筋力低下など、加齢に伴って日常生活の中で老いを実感する機会が増え、呼吸機能、心機能、腎機能やホルモンの分泌なども老化します。人間には予備力（緊急事態に備える余力のようなもの）がありますし、高齢者は身体機能に見合った生活様式へと調整するため、ある程度老化が進んでも自立して生活を送ることができます。しかし高齢になるほど予備力が低下するため、体調不良や災害など様々なストレスへの対処が難しくなり、やがては日常生活にも支障が出ます。

日常生活に最も支障をきたす要因は運動機能の老化です。高齢者の約半数が何らかの自覚症状を訴えていますが、その中でも多いのは、腰痛、肩こり、手足の関節が痛むなど、骨関節の不調です（国民生活基礎調査）。筋肉量や骨密度が減少し、関節や姿勢が変化し動かせる範囲が狭くなります。また、バランス能力が低下して、さらに多様な要因も加わって転びやすくなります。体を動かさないことや低栄養（特にたんぱく質やエネルギーの不足）に起因して、要介護状態に陥るリスクが高くなります。これは「フレイル」と呼ばれ、これに関連する老年症候群（高齢者に特徴的な心身の症状）として、次のようなものがあります。

低栄養、嚥下障害（嚥む、のみこむ力の低下）、転倒、骨折、尿失禁、睡眠障害、うつ、閉じこもり、不整脈など

これらは高齢だから仕方のないこととみなされ、不調を感じても放置されがちです。しかし適切な治療、運動、社会交流などによって悪化の予防が期待できることから、周囲が気付き受診等につなげることが重要です。

高齢者は高血圧症、糖尿病、変形性関節症など複数の慢性疾患を持っています。そのような高齢者にとっての「健康」とは、疾患が存在しない状態ではなく、疾患とうまくつきあい「日常生活が自立していること」「自分で考えることができ、意思が尊重された生活を営めること」「誰かと笑いあえること」であるなどの意見が聞かれます。

## (2)高齡者のこころ

健康なからだ、仕事・役割、収入、親きょうだいや配偶者など近しい人々の死…高齡者は長い人生で様々なものを失ってきました。また、近しい人々の死や自身の健康状態の悪化などにより、残された時間は長くないことを意識します。喪失体験をどう乗り越えていくか、また、これまでの人生を振り返り、自分の人生にどう意味を見出し、折り合いをつけることができるかが、老年期をより良く生きるための課題であると言われています。

人は自分の思いを話すことで思考が整理されます。高齡者が人生や死について語り始めた時、その人にとって重要な作業であると受け止め、ぜひ聞き役になってください。若い世代（学生等）が意見を述べる必要はありません。ただ耳を傾けてください。

高齡者の思考に最も影響を与えるのは脳の老化や認知症などの疾患です。2025年には高齡者の5人に1人が認知症になると予測されています（二宮ら、2015）。日本の高齡者には「人に迷惑をかけたくない」と願う人が多く、認知症によって周囲の人々に迷惑をかけ、自分らしく生きられないことを恐れる高齡者が大勢います。周囲の人々の反応から、自分が場にそぐわない言動をしたことに気づいたり馬鹿にされているように感じて、自尊心が傷つくことが少なくありません。できないことが増え、人に頼ることを心苦しく思い、時にはそんな自分を嫌悪している高齡者に対して、若い世代（学生等）の皆さんには、高齡者が持っている強みに気づき伝え、穏やかで楽しいお付き合いを期待します。

## 文献

- ・ 二宮利治ら（2015）.日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究.平成26年度厚生労働科学研究費補助金特別研究事業報告書. <https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/2014/141031/01405037A/201405037A0001.pdf>
- ・ 厚生労働省.国民生活基礎調査 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-21.html>

## 2)人との関わりが高齢者の健康や幸福に与える影響

京都橘大学 看護学部看護学科 松本賢哉

地域の様々な活動を通して貢献したい気持ち（ソーシャルキャピタル）は、個人の健康や幸福感を高めることが多くの研究から明らかになっています（Kawachi,2006.小谷,2011.近藤,2016）。地域の活動の中でも、組織的な活動より、趣味、スポーツ、ボランティアなど上下関係のない活動の方が幸福感を高めることが明らかとなっています。個人の傾向で分けると開放的な人は関わる人の回数が多いことが、安定的な人間関係を好む人は関わりの質が、幸福に影響しています（内田ら,2012）。

人との関わりが量か質かはそれぞれかですが、心地の良い人との関わりが大切なことが推察されます。その一例で、世代間交流があります。高齢者にとって世代間交流の利点は、自己の能力や

英知の社会的活用や、歴史的・文化的交流など世代継承性や統合性の感覚の獲得につながります。それがなぜ健康や幸福感に影響するのか、それは、心地の良い人との関わりが多くなると、日中の活動性、他者への愛情、何かに集中する時間、笑顔の回数などが、1人であるより確実に多くなります。これにより脳内の幸せホルモンと言われている、セロトニン、オキシトシン、エンドルフィン、ドーパミンの放出が増加します。幸せホルモンの増加により、不安感、抑うつ感、イライラ感、無気力感などが起こりにくくなることで健康的な生活が送れます。

#### 文献

- ・ Kawachi, I., Subramanian, S.V. & Kim, D. (eds.) (2006), Social Capital and Health, Springer, Tokyo.
- ・ 小谷みどり(2011), 「高齢者のきずな」『Life Design Report』(2011.7)
- ・ 近藤克則編 (2016), 『ケアと健康』 ミネルヴァ書房, 京都.
- ・ 内田由紀子, 遠藤由美, 柴内康文.(2012), 人間関係のスタイルと幸福感: つきあいの数と質からの検討, 実験社会心理学研究, 52(1), 63-75.

### 3) 高齢者が考える「若者像」

多くの高齢者は戦中・戦後の混乱と食糧難を経験し、戦後の日本の復興を担ってきました。自分のためというよりも国や家族など誰かのために生きてきた方が多いようです。また戦後（1945年以降）に生まれた「団塊の世代」と呼ばれる高齢者は、戦後の復

興から高度経済成長期に学生時代や働き盛りの日々を過ごし、「猛烈に努力すれば報われる」経験を重ねてきました。

生きてきた時代背景が異なる高齢者と若い世代(学生等)が、互いのありのままの姿を理解し、良い関係を築くことが重要です。しかし、高齢者は自身の経験も踏まえつつ、「若者にはこうあってほしい」という期待や「今どきの若者はこうに違いない」という思い込みがあるようです。高齢者の言動の背景にはそのような期待や思い込みがあるかもしれないことを念頭におくことで、早めに誤解を解消できるかもしれません。

### **「今どきの若者」に対する高齢者が抱きがちな思い込みの例**

- 若者はそつなくなんでもこなす
- 若者は何を考えているのかわからない
- 若者は甘やかされている
- 若者ははつらつとしているべきだ
- 若者は礼儀正しく年長者に敬意を払うべきだ
- 若者は高齢者の話を聞くのを好まない
- 若者は勉強/ゲームばかりして体力がない
- 若者は常識がない
- 自分たちが若い頃はもっとしっかりしていた
- 多様な若者がいるので、ひとくくりに言えない

### **ボランティア、有償ボランティア、学習者に対する思いの例**

- 高齢者に関心を持ち、話を聞いてくれることがうれしい

- 交流することで元気をもらえる気がする
- 未来を担う若者を応援したい
- 社会の基本や礼儀を教えてあげなければならない
- 若者の学びのために、足りない視点や気遣いを教えたい
- 進学できる状況になかった自分が大学生に教えられることなどない、緊張する
- お金を支払う以上、きちんと仕事をしてほしい

#### 4)高齢者とのコミュニケーション

高齢になると、音がどの方向から聞こえてくるのかわかりにくい、視野が狭い、複数の作業に注意を振り分ける力が低下することなどから、高齢者は自分に話しかけられたと気づきにくくなります。また、高い音や、タ行やサ行などの音を聞き分けにくくなります。そのような時に何度も聞き返すことがはばかられ、高齢者は相手が話す内容をイントネーションから推測して会話を続けようとするため、時には若い世代(学生等)がびっくりするような勘違いが生じることもあります。

また、遠くも近くも見えにくくなり、色の見え方では紫や青色の光が見えにくく、紺色と黒色の識別が難しくなります。若い世代(学生等)と高齢者が同じものを見ていても、食い違いが生じることがあります。

#### 高齢者とのコミュニケーションのコツ

- 遠くから高齢者の視野に入るように近づき、呼びかけたり

- 目を合わせたりして対話の準備を整える
- 声を大きくするよりも、ゆっくりはっきりと発音し適度な抑揚をつけて話す
  - 目線の高さを合わせ、自分の表情や口の動きを見せながら話す
  - わかりやすい言葉で簡潔に伝える
  - 大事なことは文字でも伝える
  - 頷いたり自分のことも話したりして、高齢者の話に敬意を払い、興味を持って聞いていることを言葉や態度で伝える
  - 高齢者を急かさない
  - 何度も繰り返し話すことは、その人にとって重要な思い出や心配ごとと理解する
  - コミュニケーションのお助けグッズ：思い出の品や写真、スーパーの広告(好きな食べ物、旬の食材を使った料理、食べ物にまつわる思い出話などに話題が発展)、地図、昭和の流行歌、将棋やかかるたなどのゲーム等

## 5) 高齢者と接する時の若い世代(学生等)のマナー

既に述べたように、若い世代（学生等）に対して、高齢者なりに思い込みや期待を抱いています。よりスムーズに交流や生活支援を行うために、昭和時代を過ごしてきた人々が受け入れやすいふるまいを取り入れると良いでしょう。交流・生活支援の内容や相手によってマナーが変わるため、活動を始める前にどんな配慮が必要か、検討してください。

○ **挨拶をする**

若い世代（学生等）の挨拶は素早く動作が小さいので、相手は気づかないことがあります。高齢者が挨拶をされていると気づけるように、立ち止まって相手と目を合わせ、会釈などの動作とともに挨拶をしましょう。

○ **親しくなっても礼節を保つ**

初対面の人に礼儀正しく振舞うのはもちろんのこと、高齢者と親しくなっても、年長の人に対する丁寧な言葉遣いや礼儀正しい態度を続けましょう。たとえ高齢者本人が「タメ口」を受け入れてくれたとしても、若い世代(学生等)と高齢者のやりとりを見聞きした周囲の人々が高齢者の尊厳が損なわれていると捉えます。

○ **高齢者に了解を得てから行動する**

高齢者のからだや私物に触る時、高齢者のお宅で何かをする時、トイレなどを借りる時には、その都度了解を得て行います。

○ **高齢者個人やその家庭のやり方を尊重する**

ドアの閉め方、靴の揃え方、茶碗の洗い方、ごみの捨て方など、その人(家)のやり方があります。基本的なマナーを踏まえたうえで、その人(家)のやり方を尊重してください。

○ **使ったものは元に戻す・指示された方法で片づける**

交流や生活支援のために使ったものは必ず片づけてください。高齢者（家）の物については、紛失を予防するために、高齢者に確認しながら片づけるようにしましょう。

○ **高齢者の立場から考える**

マナーの基本は相手への思いやりです。自分のふるまいについて相手がどう感じるか、何を心地よく/不快に感じるか意識しましょう。

○ **服装・身だしなみの気づかい**

破れた服、寒そうな服、ヨレヨレの服、痛そうに見えるアクセサリー、顔色が悪く見える化粧など、余計な心配をかけないように心がけましょう。

脇・腹部・大腿を露出している、汚い、動きにくい、場にそぐわない服装は避けてください。

強い匂い（香水、柔軟剤、体臭・口臭、たばこ臭等）、濃いメイク、無精ひげ、外れるアクセサリー、高齢者を傷つけるおそれのあるアクセサリー、はだし/汚れた靴下、伸びた爪、派手なマニキュアなど、相手を不快にする恐れのある身だしなみは避けてください。

○ **感染予防**

高齢者は予備力が低下しているために、インフルエンザ、新型コロナウイルス感染症、ノロウイルス感染症などの感染症が命にかかわる事態になりかねません。手洗いやマスク、換気の励行で感染拡大を予防しましょう。

若い世代(学生等)の方へ  
若い世代(学生等)と協同・支援する方へ

## 4. 生活支援コーディネーターを理解する

桃山学院大学社会学部ソーシャルデザイン学科 梅谷 進康

### 1) 生活支援体制整備事業と生活支援コーディネーター

生活支援コーディネーターは、2015年度の介護保険法改正で創設された生活支援体制整備事業に、協議体とともに位置づけられています。生活支援体制整備事業は介護保険法第115条の45第2項第5号に規定されており、地域における高齢者等への生活支援と介護予防の体制整備等を促進する事業といえます。

生活支援体制整備事業を活用した生活支援・介護予防サービス（以下、生活支援等サービス）の体制整備については、「介護予防・日常生活支援総合事業の適切かつ有効な実施を図るための指針」に、次のように記されています。

- 市町村が中心となって、元気な高齢者をはじめ、住民が担い手として参加する住民主体の活動、NPO、社会福祉法人、社会福祉協議会、地縁組織、協同組合、民間企業、シルバー人材センター等の多様な主体による多様なサービスの提供体制を構築し、高齢者を支える地域の支え合いの体制づくりを推進していく必要がある。

●生活支援等サービスの提供体制の構築に向けたコーディネーター機能を果たす生活支援コーディネーターを配置することや各地域における生活支援コーディネーターと生活支援等サービスの提供主体等が参画する、定期的な情報共有及び連携強化の場として協議体を設置すること等を通じて、互助を基本とした生活支援等サービスが創出されるよう取組を積極的に進める。

出所：厚生労働省「介護予防・日常生活支援総合事業の適切かつ有効な実施を図るための指針」（平成 27 年厚生労働省告示第 196 号）を一部改変

このように、住民やさまざまな団体・組織等による地域の支え合いの体制づくりが必要とされているなかで、生活支援コーディネーターは互助を基本とした生活支援等サービスの提供体制づくりに向けたコーディネートを行う役割を担います。それでは次に、この役割などを詳しく述べていきます。

## 2) 生活支援コーディネーターの役割・視点等

生活支援コーディネーターの役割やもつべき視点などについて、「介護予防・日常生活支援総合事業のガイドライン」にもとづき整理すると次のようになります。

### (1)役割等

生活支援コーディネーターの設置目的は、地域における生活支援等サービスの提供体制の整備に向けた取組を推進することです。

この推進のために、生活支援コーディネーターは関係者のネットワークや既存の取組・組織等も活用して、コーディネート業務を行っていきます。

このコーディネート業務が、生活支援コーディネーターの主な役割といえます。この業務内容は、①地域ニーズと資源状況の見える化、問題提起、②地縁組織等の多様な主体への協力依頼等の働きかけ、③関係者のネットワーク化、④目指す地域の姿・方針の共有、意識の統一、⑤生活支援の担い手の養成やサービスの開発（担い手を養成・組織化し、支援活動につなげる）となります。

## (2)視点等

生活支援コーディネーターには特定の資格要件はありませんが、次のような人物が望ましいとされています。

- 市民活動への理解があり、多様な理念をもつ地域のサービス提供主体と連絡調整できる立場の者で、国や都道府県が実施する研修の修了者。

そして、次の3つの視点を有することが適当とされています。

- 自身が所属する組織の活動の枠組みを超えた視点、地域の公益的活動の視点、公平中立な視点。

以上のような役割や視点を有する生活支援コーディネーターの市町村ごとの配置人数や配置先は、地域の実情に応じた多様な形態が可能となっています。

## 文献

- ・ 厚生労働省「介護予防・日常生活支援総合事業の適切かつ有効な実施を図るための指針」（平成 27 年厚生労働省告示第 196 号）.
- ・ 厚生労働省「介護予防・日常生活支援総合事業のガイドライン」（平成 27 年 6 月 5 日老発 0605 第 5 号）.

## 5. 大学が世代間交流や高齢者の生活支援に参加する際の留意点

京都橘大学 健康科学部 救命救急学科 平出 敦

この事業を通じて、多くのエキスパートから「若い世代（学生等）の参加を促進するマニュアル」に対する示唆やメッセージを頂戴しましたが、主として京都橘大学の地域連携センターや、山科区社会福祉協議会での助言を中心にまとめました。

「どの地域でも実践可能な」若い世代（学生等）の参加を促進するマニュアルというテーマでこのマニュアルを構成していますが、大学と高齢者との接点が従来少なかった地域では、大学関係者は以下の点について特に考慮することが望ましいでしょう。

- 1) 生活支援コーディネーターは生活支援員ではなく、地域の生活支援のコーディネーションを担当する役割を担っています。さまざまな取り組みに、若い世代（学生等）が企画の段階から参加できるように協同していただくことは意義のあることです。
- 2) 地域の元気な高齢者を中心とする地域のグループと若い世代

(学生等) がコラボレーションすることはすばらしいことですが、背景となる地域の枠組みや実態の理解は必要です。たとえば、地域活動の単位として、最近は小中学校の学区が用いられますが、昔ながらのコミュニティの単位が生きていることがあります。

- 3) イベント的な取り組みは、若い世代(学生等)と地域の高齢者との関係を作っていく際に、取り組みとしてアプローチしやすい部分があります。日常的な、高齢者の困りごとの支援に限定することは、必ずしも若い世代(学生等)の参加を継続的に促進することにつながりません。
- 4) セルフネグレクトの高齢者など、個別的にアプローチに注意すべき高齢者に対しては、「おだやかな見守り」「担当による見守り」「専門的な見守り」の段階が整理されています。おだやかな見守りは、日常生活の中で普段と異なるシグナルが高齢者に見られた際に適応されるもので、若い世代が安全に関与する範囲として適当といえます。高齢者の困りごとについて、地域の民生委員、地域包括支援センターなどに、まかせるべきところは、まかせるようにすべきです。
- 5) 若い世代(学生等)の安全は、極めて重要です。多くの大学で学生は教育研究活動中の災害障害保険に加入しますが、保障の範囲を確認しましょう。また、社会福祉協議会が窓口に

なっているボランティア活動保険や、イベントの際に適応されるボランティア行事用保険は手厚いことから、必要に応じて考慮してもよいかと考えます。

- 6) 若い世代（学生等）も高齢者のグループも、慣れるまでは両者の距離感や要望の程度が手探りであることから、行き違いも少なくないのが普通です。京都橘大学では、地域のグループから大学へのコラボレーションの申し出時に、一定の様式(p.24)を提出していただいています。この様式を契機に、活動の目的や若い世代(学生等)にとっての参加意義などが明瞭になり、活動が円滑になります。
- 7) 若い世代（学生等）には、自由な発想や斬新なアイデアを生み出す力があります。単に、若い世代（学生等）を労働力としてあてにするのではなく、このような学生の発想力や、学生自身の「わくわく感」を刺激できるような協同のあり方が望ましいといえます。
- 8) 教育、研究に続く大学の使命として地域への貢献がますます重視されるようになりました。地域にとって、学生は大学の有する最も重要な資源です。大学の地域連携センターや連携室では、若い世代（学生等）と地元の高齢者団体とのハブになるとともに、学生が教育的見地からも、はつらつと参加できるようにする機能を充実させることが求められます。

課題解決に向けた連携依頼 申込書					
					令和 年 月 日
ご依頼者	会社・団体・機関名				部署名
	ご担当者名				
連絡先	住所(〒 )				
	TEL				FAX
	Mail				
課題	京都橋大学からの協力を得て、解決したいと考えている課題、あるいは、促進させたいと考えている活動をできるだけ詳しくご説明ください。ただし、京都橋大学には、教育・学術機関として、参画できない活動があります。 ※詳細は、枠外下部をご参照ください。				
これまでの経緯	なぜ、上記の課題を解決したいと考えるのか、背景や必要性を、できるだけ詳しくご説明ください。				
目的	その課題を解決することによってどのようなゴールに到達したいか、ご説明ください。				
活動期間	令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日				
活動地域					
希望学部					
希望教員等					
連携メンバー					
予算	予算の工面が できない・できる( )円程度				
その他・備考					
回答期限					
※その他、企画書や過去のチラシなど参考となる資料がございましたら、併せてご提出ください。					
京都橋大学地域連携センターが協力できる活動： <ul style="list-style-type: none"> <li>・営利を目的としないもの</li> <li>・政治的・宗教的活動を目的としないもの</li> <li>・個人で募集する活動でないもの</li> <li>・安全性が高いと判断されるもの</li> <li>・医療行為等、特定の資格を必要とする活動でないもの</li> <li>・受け入れた学生に対し、教育的配慮を伴った対応が可能なもの</li> <li>・その他、地域連携センターが適当と判断するもの（企画書などを提出してくださると参考になります）</li> </ul>					
					[提出・照会先]
					京都橋大学 地域連携センター
					TEL: 075-574-4342
					FAX: 075-574-4149
					Mail : aca-ext@tachibana-u.ac.jp

## 6. 若い世代(学生等)と高齢者の交流・生活支援のコツ

ここまで、世代間交流の要となる若い世代(学生等)と高齢者についての理解、また、両者をつなぐ生活支援コーディネーターの役割について解説しました。

ここからは、若い世代(学生等)と高齢者の交流・生活支援を進める上での具体的なコツについて、研究成果、全国における先駆的事例調査、有識者へのインタビューなどをもとに整理しました。生活支援の一般化はたいへん難しいものの、調査研究事業から得られた知見から汎用性のあるものを中心にまとめています。

コツに添えた研究【1】～【5】は、巻末の参考資料に掲載されています。

### 若い世代(学生等)の方へ 若い世代(学生等)と協同・支援する方へ

#### 1)若い世代(学生等)の活動を支える環境づくり

##### ○行政や社会福祉協議会(社協)とつながる

高齢者との交流・生活支援の取り組みを進める上では、地域の福祉活動の拠点である市区町村社会福祉協議会(市区町村社協)が、最も身近な相談の場となります。活動拠点にある社協に相談しましょう。

社協のボランティアセンターではボランティア活動に関する相談や活動先の紹介、ボランティアや高齢者ケアに関する研修の紹介等が受けられます。

また、高齢者は心配性です。調査に参加する高齢者をリクルートする場合は、公的な機関もしくはそれに準じる機関とつながりを持ち、公的な機関から高齢者に呼び掛けてもらうと高齢者が安心して参加できます。

(研究【3】より)

#### ○専門機関に相談・引継ぎできる体制をもつ

若い世代（学生等）にとって難しい依頼を引き受けることは、若い世代（学生等）と高齢者の双方に負担が高まり、好ましくないことです。専門機関に引継ぎを依頼できるように、あらかじめ若い世代（学生等）の活動計画を専門機関などに報告すること、勉強会など定期的なコミュニケーションをとることで、顔つなぎしておきましょう。

#### ○若い世代（学生等）が相談できるように専門機関とネットワークをつないでおく

若い世代（学生等）が活動を始める・推進するうえで相談しやすいように、専門機関とネットワークをつないでおくことが重要です。そのためには、地域のステークホルダーが連携することともに、若い世代（学生等）から多様な組織や人材に「相談」しま

しょう。相談という形をとることで、具体的な支援が得られやすくなります。できる範囲での協働を求めましょう。

このような時に若い世代（学生等）と周囲の組織や人材とつなぐことは、生活支援コーディネーターの機能の一つです。若い世代（学生等）は、まずは社会福祉協議会（社協）に相談することをおすすめします。

#### ○授業として始めることで教職員と活動の基盤を整える

大学等に所属する若い世代（学生等）が活動を始める場合、まずは正課授業として始めて教員が手厚くサポートに入り、基盤を整えてから、学生の裁量に応じて単位が取れる科目→自由科目→サークル活動などに切り替えていくと良いでしょう。

（研究【1】～【5】より）

#### ○高齢者が教える側、若い世代（学生等）が学ぶ側という立場を敢えて強みと捉える

研究【2】では授業の一環として高齢者との交流を取り入れました。課題レポートからも、学生は高齢者から様々な学びを得ていることがわかります。数名の学生の学びには高齢者を通して対象理解だけでなく、「より良い生き方を考える機会となった」「気持ち救われた」などの記載もありました。若い世代（学生等）は、人生の先輩である高齢者とのコミュニケーションを通して人生勉強をさせてもらい、逆に助けていただいていることもわかりました。高齢者に対しては若い世代（学生等）の特徴について情報提

供を行い、若い世代（学生等）には、高齢者が一般的に「若者」にどのようなイメージを持ち、どのような振る舞いを期待しているかを説明するなど、**お互いが役割を果たしながら、Win-Win な活動となるような工夫も必要**だと考えています。

（研究【1】【2】より）

#### ○保険に加入する

社会福祉協議会（社協）を通じてボランティア活動保険に加入できます。ただし、授業の一環やインターンシップとしてのボランティア活動、有償ボランティア活動など、ボランティア活動保険の対象とならないものもあるため、社会福祉協議会に相談してください。

社会福祉協議会

<https://www.shakyo.or.jp/network/kenshakyo/index.html>

#### ○研修を受講する/行う

各自治体には高齢者の生活支援に携わるボランティア人材を養成する単発研修があるため、若い世代（学生等）の皆さんは役場や社会福祉協議会に問い合わせましょう。

また、実際に高齢者に講義をしていただいたり、コミュニケーションや支援のシミュレーションをしておくスムーズに導入できます。

（研究【1】【3】より）

## 若い世代(学生等)と協同・支援する方へ

### 2)若い世代(学生等)を探し、高齢者との交流・生活支援を動機づける

#### ○若い世代(学生等)が所属する団体を活かす

各種のサークルや大学のゼミなどの組織は、連絡窓口となるリーダーや教職員がいる、メンバー間の連絡ツールが整っている、チームで参加することで心強い、融通が利くなどの利点があります。

若い世代(学生等)は、高齢者との交流機会がある既存の団体に加入したり、自分たちで団体をつくると良いでしょう。

#### ○学校とつながる

ほとんどの大学には地域社会と連携し社会貢献に取り組むための部署があります。生活支援コーディネーターは、大学事務局にアクセスし、相談すると良いでしょう。その際、大学(学部)の特性をよく理解し、学生の強みを生かす支援内容や弱みをカバーする運営方法を検討できると、活動の開始や継続につながります。

#### ○若い世代(学生等)にとっての意義を可視化する

勉強やアルバイトに忙しい若い世代(学生等)が時間とエネルギーを注ぐ甲斐があることをわかりやすく伝えること活動を始め・継続する動機となります。その交流が若い世代(学生等)にとっても楽しめること、癒しになること、専攻分野の学びにつながる

こと、就活や自己の成長に活かされること、高齢者が変化していく喜びなどを言葉や画像で伝えましょう。

また、地域での活動実績が履歴書に記載でき、就職活動に活かせることも、若い世代（学生等）にとって大きなメリットであると考えられます。

#### ○授業や研究に活用できる機会にする

京都橘大学の取り組みや先駆的事例集にあるように、大学の授業や研究、課外活動に位置付けることで、人材確保や継続的な関わりにつながります。近くに大学や学校がない地域でも、安価で安全な宿泊場所が確保できれば、長期休暇を利用して交流や生活支援が実現できるかもしれません。

また、大学と地域の機関が連携し、地域の組織が学生のインターンシップを受け入れる体制を作ることも一案です。

#### ○SNSを活用する

若い世代（学生等）は SNS を活用して情報を集めるため、SNS の効果的な活用が重要です。短い動画で若い世代（学生等）と高齢者の交流の実際を見せることで、雰囲気やその事業の理念など、言葉では示しにくいことも伝えることができます。また、ハッシュタグをうまくつけることで、若い世代（学生等）の目に触れやすくなるだけでなく、アルバイトや研究フィールドを探す若い世代（学生等）とつながるなど、想定外のところからも人材を集めることができます。

さらに、日常の連絡ツールとしても、SNS や大学の遠隔授業のアプリケーションを活用することで連絡・連携がスムーズになります。

## 若い世代(学生等)と協同・支援する方へ

### 3)若い世代(学生等)の主体性を引き出す

#### ○若い世代（学生等）を大切にす

福祉の場では、支援をする側と支援される側の関係性がしばしば話題になります。若い世代（学生等）と高齢者は相互に支援をする/される関係であり、若い世代(学生等)と高齢者は対等な関係です。生活支援の担い手には自己犠牲が期待されることがありますが、高齢者を大切にすると同様に若い世代（学生等）も大切にされることが、取り組みの継続・発展に影響します。若い世代（学生等）が参加しやすい仕組みづくりや適時適切な労いなどの配慮によって、自己犠牲を強いられていると感じることなく主体的に取り組めることでしょう。

#### ○若い世代（学生等）の心理的安全性を保障する

心理的安全性とは、組織の中で自分の考えや気持ちを安心して発言できる状態を指します。若い世代(学生等)が自然に自由に、心に感じたことを短い語句でもよいので、発言できる雰囲気であれば、自然に楽しいコミュニケーションを実現できるのではないかとされるものでした。教員や生活支援コーディネーターは若

い世代（学生等）が不安（自分が無知と思われる？ 無能と思われる？ 邪魔をしていると思われる？ 否定的だと思われる？）を軽減できるような関わりやムードづくりが求められます。若い世代（学生等）が複数人で行動できるようにすることも一案です。

（研究【1】より）

○若い世代（学生等）が主体的に参加するのを待つ

ボランティア活動として若い世代（学生等）が参加する場合は、先輩や教員からの強い勧誘では継続参加が難しく、若い世代（学生等）が活動を十分に理解し、主体的に参加を決めることが重要です。あるコーディネーターは「ボランティアの集会の参加確認は一切とらず、決まった日時に自分がそこにいるようにする」と話されていました。「**引っ張りこむ**」よりも「**待つ**」ことが主体性を引き出し、本当に継続できる人材の参加につながります。

○興味を持っている学生をリクルートする

教員主導で高齢者との交流・生活支援に取り組む時には、そのつもりがなくても教員から学生に対する強制力が働きがちです。日常の会話から、高齢者が好き、高齢者の方が話しやすい、将来の仕事に活かしたいなど、理由は様々ですが、高齢者の健康や生活の支援に興味のある学生を見つけ誘うと、主体的な取り組みにつながります。

（研究【3】より）

○若い世代（学生等）が得意なことを切り口にする

音楽や絵画、スポーツ、それぞれ学生がこれまで積み上げてきた得意なことや好きなことを題材とした、多世代交流を行うと、若い世代(学生等)が自分の得意なことを高齢者などにどの様に行なってもらうか、提供できるかを、より深く考えるきっかけになります。

【研究4より】

○若い世代（学生等）のイニシアティブを奪わない

周囲の大人、特に大学の教職員が表に出ると学生は後ろに下がりがちです。学生がいつでも教職員に相談や報告ができる仕組みを作り、その後は学生の活動を見守る仕掛けが求められます。

○若い世代（学生等）に評価を感じさせない

大学等を基盤に交流・生活支援を行う場合、単位の取得や学習目標の到達等を意識することは避けられません。その場合は「学習者」と「次の世代に託す者」という、両者が獲得すべき課題を念頭においた仕組みをあえて作ることが考えられます。また、大学の課外活動として取り組む場合には、レポート課題を想起させる報告書を用いるよりも、ラウンドテーブルで自由に語り合える報告形式などの演出が考えられます。

(研究【2】より)

## 若い世代(学生等)の方へ 若い世代(学生等)と協同・支援する方へ

### 4)若い世代(学生等)が活動を始める時のコツ

○若い世代（学生等）向きの依頼を仕分ける

まずは、**若い世代（学生等）に適した依頼か、専門職に託すべき依頼かを見極めます**。若い世代（学生等）も無理なく取り組めて楽しめるような依頼が、やらされ感を防ぎ、対象となる高齢者個人のために何かをしたいという主体性が育まれます。

研究【2】で課題レポートをテキストマイニングした結果として捉えられたニーズの視点として、高齢者の困りごと上位に挙がった「頼みにくい」は、核家族化や、近隣住民との繋がりや軽薄化が進む中での現実を表していると考えます。**小さなことではあるものの、日常に密着した電球の交換、高い場所の掃除、網戸の洗浄などの困りごとは、なかなか解決しがたい困りごと**です。そのような日常に潜むちょっとした困りごとを気軽に相談できる場所や支援ができる存在は、非常に重要な存在と言えます。

（研究【2】より）

○若い世代（学生等）の意思を尊重して依頼を受ける

若い世代（学生等）が誰にどんな支援を行いたいのか、多忙な生活の中で高齢者との交流・生活支援にどれだけ時間を割き、注力するかをあらかじめ議論しましょう。

若い世代（学生等）が挑戦したい・一緒に楽しみたいと思える依頼を優先しましょう。若い世代（学生等）のわがままを聞くという意味ではなく、若い世代（学生等）が**その高齢者の困りごと**に共感できるような事例紹介や、支援の意義や方法についてワクワクできるような検討などの工夫が功を奏すでしょう。

○目の前の一人の人の支援から始め、成功体験を重ねる

活動初期は若い世代（学生等）が状況を把握し実行しやすくするためにも、一人の高齢者への支援から始めて試行錯誤し、高齢者の反応を評価しましょう。小さな目標、叶えやすい依頼で成功体験を重ね、一事例から似たような状況にある複数人へと対象を拡大します。

○まずはイベント的な取り組みから始める

若い世代（学生等）は授業、アルバイト、部活などで多忙なため、定期的な取り組みへの参加は約束をためらいます。単発の取り組みから始めることで、関心をもつ人の参加を促進できるかもしれません。

（研究【1】より）

## 若い世代(学生等)と協同・支援する方へ

### 5)若い世代(学生等)と高齢者のマッチングのコツ

○対等な個人と個人をマッチングする

対象となる高齢者個人だけではなく、若い世代（学生等）とも十分にコミュニケーションをとり、性格や希望などを知ったうえでマッチングを考えます。「学生さん」と「高齢者」という大枠ではなく、個人の〇〇さんと〇〇さんというとらえ方を踏まえてマッチングしましょう。その結果「やらされている」「してあげた」でなく、「一緒に楽しむ」ことができ、関係が継続するようです。

#### ○高齢者の満足を重視してマッチングする

このマニュアルでは、若い世代（学生等）の意思を優先しているように読めるかもしれませんが、高齢者を重視することは言うまでもありません。しかし高齢者と学生の双方が満足することは難しいのが現状です。その場合には、高齢者との交流や困りごとの解決が目的であることを若い世代（学生等）と共に再確認しましょう。

#### ○高齢者の支援ニーズの内容と学年の特性を考慮してマッチングする

看護学生は1年次よりも、3年次の方が、「買い物に行けない」「高いところの掃除が大変」「運動や人と交流する機会が少ない」というように、日常生活の困りごとを具体的に把握できるようになっていました。したがって、学年を重ねることで日常生活の困りごとへの支援ができるようになっていけると考えられるため、多様な学年・経験をもつ学生の参加を募り、高齢者の生活の支援ニーズと、若い世代（学生等）の特徴をマッチングして、それぞれ

が役割を果たしつつ、しっかりと高齢者のニーズを満たせるようにすることが重要です。

(研究【2】より)

○学科の専門性を生かした交流とする

たとえば作業療法学科であれば「ものづくり」という作業を媒介とした高齢者と学生の取り組みができます。そのなかで学生は世代が違う人とのコミュニケーションの取り方や、作業をどのように説明すると伝わるのかを学んでいきます。そして自分が作業療法士となるうえで、また実習に出るうえで必要なことと自覚していきます。そうした自分たちの専門性を生かしたことで喜ばれたり感謝されたりする経験は学生側のモチベーションにつながります。

(研究【5】より)

○意外な組み合わせも案外とうまくいく

若い世代（学生等）個人と高齢者個人のマッチングに関しては、個別性を見極めてマッチングする事例もあれば、双方の化学反応を期待して敢えてマッチングしない事例など、さまざまでした。コミュニケーション力が低い若い世代(学生等)であっても、高齢者はその不器用さをかわいがってくれます。若い世代(学生等)と高齢者は実は相性がよく、どのような組み合わせでも結果オーライとなることが多いようです。

### ○マッチング後も見守り続ける

若い世代（学生等）と高齢者の関係が築けた後も、個人的なやり取りではなく生活支援コーディネーターを通すという先駆的事例がありました。若い世代（学生等）と高齢者の関係が良好になればこそそのトラブルを予防できます。

### ○トラブルを分析する

トラブルが発生した時はトラブルの結果やその対応に注目しがちですが、多くの場合、高齢者や若い世代（学生等）に明白な問題があるというわけではなく、理由に着目してトラブルの過程を丁寧に分析することで、真のニーズが見えてきたりします。

## **若い世代(学生等)の方へ 若い世代(学生等)と協同・支援する方へ**

## 6)支援を成功させるコツ

### ○「楽しむ」ことに注力する

高齢者に楽しんでほしい、高齢者と一緒に楽しみたいという動機が、高齢者の笑顔や行動の変化につながるようです。

高齢者と学生が自然に自分の感情が言葉として発せられている会話は、楽しい会話になるようです。学生が率直に「すごい」「かっこいい」といった言葉が自然に発せられるコミュニケーションは円滑だといえるかもしれません。

（研究【1】【4】【5】より）

○高齢者の好きなこと、できることを探す

医療・福祉職はともすると、障害や機能低下にばかり目が向き、それをなんとか支援しよう、鍛えようとする思考になりがちです。そうではなく、高齢者が得意にしていること、興味を持つこと、出来ることを一緒に行い、楽しむことで双方がより元気になります。

【研究4より】

○言葉以外のコミュニケーションも楽しむ

人と話すのが得意な人もいれば、そうでない人もいます。話をしないとコミュニケーションが取れないかとういうと決してそうではありません。一緒に歌を歌う、折り紙をする、ものを作る、料理をする、こうしたことも立派なコミュニケーションです。同じ時間を、共にする。微笑みながら話をしっかり聞く、地域で活動するときには、そうしたことがとても大切なことであることも心にとめてください。

【研究4より】

○健康調査の結果は調査当日にフィードバックする

参加した高齢者は、自身の健康状態が気になります。結果のフィードバックに時間が経過してしまうと興味も薄れてしまいます。調査当日に結果をフィードバックすると、参加高齢者の満足度が高まります。

(研究【3】より)

### ○無理なく取り組めて満足度の高い作業を考える

高齢者に喜んでもらえる作業（ものづくり）としては、まず短時間で完成でき、それほど難しくなく（学生が援助することもあります）、見栄えがよく、時には流行を意識したもの、そして各自のオリジナリティが出せるものがよいと思います。学生が手伝って一緒に完成させることも楽しい経験となります。みんな同じものができるとはではなく、各自違ったものを披露するのも楽しい交流となっていきます。そのように高齢者が生き生きとされる作業を考えることも学生の学びにつながっていきます。

（研究【5】より）

### ○飲食を取り入れる

同じ釜の飯を食べた仲と表現されるように、飲んだり食べたりしながらのコミュニケーションやイベントは高齢者にとっても若い世代(学生等)にとっても楽しさやリラクゼーションをもたらします。研究【4】では食品を配布することで普段は参加しない高齢男性の参加が増えました。

（研究【4】より）

## 若い世代(学生等)の方へ 若い世代(学生等)と協同・支援する方へ

### 7)活動を継続するためのコツ

#### ○引継ぎのシステム整備

若い世代（学生等）を中心とする活動の限界は、卒業や就職などによって長期間の参画が難しいことです。カリスマ性のある人材を中心に活動が活発になったとしても、次の世代が気後れし、世代交代に失敗することもあります。若い世代（学生等）は部活動等には慣れているため、常に後輩世代のサブリーダーを複数人養成し、時間をかけて無理なく引き継いでいきましょう。

#### ○若い世代（学生等）自身が楽しんでいると気づける働きかけ

授業や課外活動で取り組む場合は、楽しいと感じる前に「学ぶ」「単位を取る」ことがよぎりがちです。また、若い世代(学生等)が慣れないうちは、相手の反応をみたり自分の感情に気づいたりすることが難しいこともあるでしょう。支援場面や定期的な振り返りの機会には、コーディネーターや教職員自身が意図的に高齢者の反応を言葉にする、自身が楽しんでいる姿を見せる、若い世代（学生等）に楽しいかどうかを問いかけることで、若い世代(学生等)が楽しんで取り組んでいることへの気づきを促してください。「楽しい」とは、笑うような場面に限らず、動機を持って取り組み、達成感を得られること、若い世代(学生等)が自らの成長を実感できることなどが含まれます。

### ○高齢者の反応をフィードバックする

若い世代（学生等）のちょっとした関わりで、専門職には見せない表情や反応が生まれます。しかし、若い世代（学生等）は、高齢者の反応をみる余裕がなく、自分が行うことは取るに足りないことだという思い込みを抱きがちです。周囲が、高齢者が喜んだり、感謝したりしている表情や言葉を引き出すように関わると若い世代(学生等)が気付きやすくなります。また、専門職からのフィードバックは若い世代(学生等)の自信を高めることにつながります。

### ○サービスを有償化し、経済的基盤を安定させる

「ボランティア」という語感から若い世代（学生等）の無料奉仕をイメージしがちですが、全国で成功している若い世代（学生等）と高齢者の交流・生活支援プロジェクトの多くがサービスを有償化していました。

料金を払うことで高齢者がサービスを依頼しやすくなり、有償だからこそつながりやすくなると考えられます。また、アルバイトに割く時間を有償ボランティア活動に充てることで時間の余裕ができ、自己犠牲を強いられると感じることなく自発的に取り組む余裕が生まれます。

有償ボランティアに対する認知が十分に広がっていないことから、交流・支援を始める時に十分な説明と同意の手続きが重要となります。

経済的基盤を安定させるために、積極的な営業活動を行ってい

る組織では、たとえば訪問介護事業所では手の回らない介護保険外サービスを請け負うことを営業し、成功していました。このように若い世代（学生等）が社会貢献をビジネスとして展開させるためには、経営について学ぶこと、先駆者や地域の実業家に相談をすることなどが行われていました。

#### ○困ったときにサポートしてくれる人材・組織を増やす

若い世代（学生等）だけで活動を継続・発展させることは困難で、できるだけ多くの人々や組織に見守られ、相談できる環境を確保します。若い世代（学生等）の募集だけでなく、高齢者とその家族、また支援してくれる多様な人材や組織に向けて、対象の特性にあわせて SNS を使い分け、発信します。支援してくれる方々が無理なく協力できることをお願いすることで、協力いただく素地を整えておくといいでしょう。

#### ○失敗を恐れすぎない

社会経験が少ない若い世代（学生等）の挑戦ですから、失敗は不可避ともいえます。先駆的事例のインタビューで「大きな失敗を回避しながらも小さな失敗を繰り返して、より良い価値やサービスに近づこうと常に努力し続けること」（先駆的事例集 p74）という一言が印象的でした。

失敗は成功の母、失敗を十分に分析し、より良い活動へとつなげていきましょう！

## 7. 参考

### 1) 京都橘大学の今までの高齢者支援の取り組み紹介

京都橘大学 健康学部救急救命学科 平出 敦

#### **事業の概要・・・マニュアル作成に至るまでの展開と概略**

本事業の最終目標は、「どの地域でも実践可能な“若い世代の参加を促進する高齢者の生活支援マニュアル案」を提示することです。

そのために、目的 1：高齢者の主観的幸福感の基礎調査、目的 2：先駆的事例集の編集、目的 3：大学における教育と高齢者の支援プログラムのための実践がどのように、このマニュアルに向けて、展開したかを概説します。

#### **(1) 目的 1 に関する概要**

本事業の目的 1 である高齢者の主観的幸福感の基礎調査では、全国の 65 歳以上の男性 5000 人、女性 5000 人の合計 10000 人を対象に、インターネットで無記名自己回答式 web 調査を実施しました。調査の目的は、高齢者が自分自身をどの程度幸福だと実感もしくは認識しているかを主観的幸福感という尺度で測定し、回答者の属性や活動状況等と関連しているかを明らかにすることでした。主観的幸福感 (Subjective well-being) とは、もともと老年学関連で使われてきた概念ですが、心理学領域では今日、高齢者以外の集団でも使われる尺度となりました。その尺度を、15 項

目の質問への回答結果によって判定しました。これは、「幸せだ」と感じるかどうかといった感性による尺度だけではなく、回答者が自分の人生を肯定的にみなしているかどうかといった認知に関する尺度も含まれています。したがって、回答時の一過性の気分だけでない、日常生活や信条も含めた尺度として安定していることから本事業における研究調査の基礎調査に用いました。

その結果、まずこの大きな集団において、主観的幸福感、ほぼ正規分布(normal distribution)していました。正規分布は、大きな集団における身長分布のように、人間のもつ特性の自然なばらつきでよく見られる分布であり、この尺度に関するこの集団での分布が、特別な偏りによらないことを示唆しています。また、回答者のさまざまな属性との関連では、**年齢や年収といった個人の基本特性より、社会教育活動、社会福祉奉仕活動、地域社会活動とより強く関連している**ことが明らかになりました。すなわちこれらの活動に積極的な高齢者ほど主観的幸福感が高いという結果でした。また、この調査では、回答者が所属する自治体の状況とも関係がありました。いずれにしても、本調査結果は、高齢者の自身の年齢や年収といった基本属性より、自分を取りまく社会的環境に大きく依存するとともに、社会的な働きかけを日常的にどの程度しているかといった動的な因子が高齢者の幸せの自覚に結びついているのではないかという仮説を導くものでした。

しかし、この結果をもって、高齢者自身の社会参加や世代間交流を促すことで高齢者の主観的幸福感の増加に寄与するという結論には、必ずしもなりません。そこで、このことを、実際の若い

世代（学生等）による支援の受け入れや、世代間交流という形で、先駆的事例を調査することによって検証しました。

## （２）目的２に関する概要

本事業の目的２では、若い世代（学生等）による高齢者の生活支援の先駆的事例を編集しました。これにより、どのような“しかけ”や“はたらきかけ”が、高齢者の生活支援に、若い世代の参画を促し、高齢者にとっても有益であるかを明らかにしようと試みました。その際、基礎調査で得られた仮説をもとに、高齢者の自発的なモチベーションを刺激して高齢者自身の社会参加につながっているかを検討しました。

その結果、全国から12事例がピックアップされ、大きく4つのパターンに分類できました。異世代が同じエリアに住まい、日常生活に密着したかたちをとる「密着型」、日常生活の中で異世代が顔を合わせる場を提供する「居場所提供型」、高齢者の困りごとに若者が駆けつけて問題を解決する「駆けつけ型」、祭りや催しを開催することで世代間交流を深める「イベント型」です。多くは、これらのパターンを組み合わせる活動を展開していることもわかりました。すなわち、

「密着型」                      高齢化が進む団地や地域に若者が住む、といったスタイル

「居場所提供型」              高齢者や若者が集える場を設け、常時開放するスタイル

「駆けつけ型」                高齢者が困ったとき等に若者が訪問しサポ

ートするスタイル

「イベント型」 イベントを開催し、交流機会を設けるスタイル

です。

このうち、密着型+イベント型としては、神奈川大学サッカー部の『竹山団地プロジェクト』、神奈川県住宅供給公社の『様々な大学との連携による団地再生』、北海道札幌市+北星学園大学の『もみじ台団地プロジェクト』、認定 NPO 法人である街 ing 本郷の『書生生活』が該当しました。また、居場所提供型+イベント型としては、一般社団法人であるえんがおの『高齢者と若者の居場所』、豊中社会福祉協議会の『豊中あぐり』が該当しました。

さらに、駆けつけ型+イベント型として、社会福祉法人 ゆうゆうの『学生と高齢者をつなぐ地域活動』をとりあげました。また、株式会社 Liberty Gate の『アシスタ～高齢者と若者のマッチング～』、千葉商科大学 人間社会学部 『高齢者を対象とした生活支援サービスのマネジメントシステム構築』、岡山県立大学 学生サークル TAMAGO の『手作り弁当プロジェクト』が該当しました。

イベント型としては、Community Nurse Company 株式会社の『地域おせっかい会議』、名寄市立大学 『おばあちゃんが伝えたい手作りレシピ』をとりあげました。

これらの事例から抽出された事業継続のポイントは、1. つなぐ（コーディネート ・ マッチング）、経営（マネジメント）、場（社会的インフラ）、楽しむ（エンジョイ）、個（インディビジュアル）、地域創生（コミュニティデザイン）です。

まず、今回の事例を通して明らかなのは、**人々をつなぐコーディネーターが存在する**ということです。**様々な人々をつないで化学反応を起こすキーマンが重要であり、世代間交流の継続を考える時、つなぐ人（コーディネーター）の存在とその後継者の養成がカギ**になります。

次に**経営が重要**です。たとえば、活動を継続していくには、資金が必要で、各事例で、**経済的基盤を構築することも工夫されて**いました。地域貢献活動を行うことで行政から助成金を得たり、行政から業務委託を受けること、また、認定 NPO 法人になることで、個人や企業から寄付を受けやすくすることで、自走を実現化している事例もありました。

「場」も重要でした。孤立する可能性があるのは高齢者だけではなく不登校や社会になじめない若者、進学のため一人暮らしをする学生も同様で、**健全な社会的インフラを提供することで、異世代の生活支援につながっている**という例もみられました。

さらに、ほぼすべての事例で述べられている重要なキーワードは、「**楽しくないと続かない**」です。若い世代も高齢者もともに楽しむことができることは、継続するということが示唆されました。**若い世代のイニシアティブを奪わないこと、効果的な動機付けをすること、達成感を得られるようにすること、若者が自らの成長を実感できるようにすること**などは、楽しんで活動できる場を提供していく鍵でした。

**地域で暮らす個人が尊重され、高齢者も若者も、互いに個と個が**つながっていくことで絆が生まれ、安全で安心な生活がもたら

されるという前提は、各事例で確認されました。

基礎調査でも、**高齢者の主観的幸福感が周囲の社会的環境や、自身の社会的活動に依存する**ことが示唆されましたが、「地域おせっかい会議」にあるように、地域ぐるみの活動も重要であることが事例より示されていました。まとめると以下のような概略図となります。



図 1. 事例からわかった世代間交流継続のポイント

### (3) 目的3に関する概要

本事業の目的3として、実際に大学における教育と高齢者の支援プログラムを実践した場合の、手ごたえや、検証内容概説します。

本事業の中で実践されたプロジェクトの教育的位置づけや、従来からの経緯を下図に示しました。

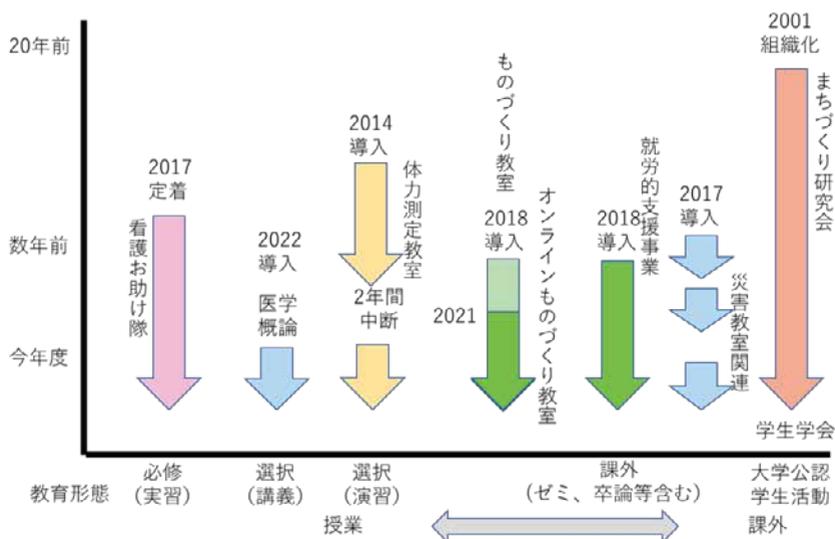


図 2.本事業の歴史的背景

ピンク色：看護学科、ブルー：健康科学部（救急救命学科が主体）、イエロー：理学療法学科、グリーン：作業療法学科、オレンジ：非医療系学部（経営、経済等）の学生による活動を示す

この中で最も右の「まちづくり研究会」については、大学全体で長年培ってきた基盤的活動であり、今回の事業ではそれ以外の6つのプロジェクトをとりあげました。今回、単年度事業ではありますが、現実には、この事業のためにカリキュラム化した医学概論をのぞけば、すべて「準備」期間を経てきたプロジェクトです。いずれも学生と高齢者のかかわりをテーマにした教育活動です。先駆的事例はいずれも、教育活動というよりひとつのビジネス展開、地域事業展開ともいえますが、目的3では、教員が介在して展開している点が異なります。たとえば、目的1、目的2で、高齢者自身の社会的はたらきかけと、「楽しむ」ことの重要性が示唆されましたが、医学概論の授業では、学生と高齢者のより楽しいコミュニケーションの要素を形態素解析を用いて調査しました。この授業は、今年度、導入された1学年のための授業ですが、看護学部の高齢者と関わる授業は、各学年で重層的に実施していることから、学生の成熟や成長にともなう変化に関する解析を行いました。体力測定教室、ものづくり教室（2021年からはオンラインものづくり教室）、就労的支援では、高齢者が社会活動を行う行為を学生が支援するものであり、目的1の知見と呼応しています。教育活動形態としては、看護お助け隊が必修の実習に組み入れられていますが、医学概論は1年生に対する選択授業でした。体力測定教室は、途中から単位化されるようになり選択演習に組み入れられています。それ以外は課外活動として推進されていますが、ゼミナール学生の参加や卒業論文での材料としても扱われています。学生サークルのような形態をとっているまちづく

り研究会も、実際は学生会という大学支援組織の学生団体のひとつとして位置づけられています。なお、図 7-2 のカラムはそれぞれの学科によって色分けされており、ピンクが看護学部（看護学科）、ブルーが健康科学部（救急救命学科が主体）、イエローが理学療法学科、グリーンが作業療法学科、オレンジが非医療系学部（経営、経済等）です。

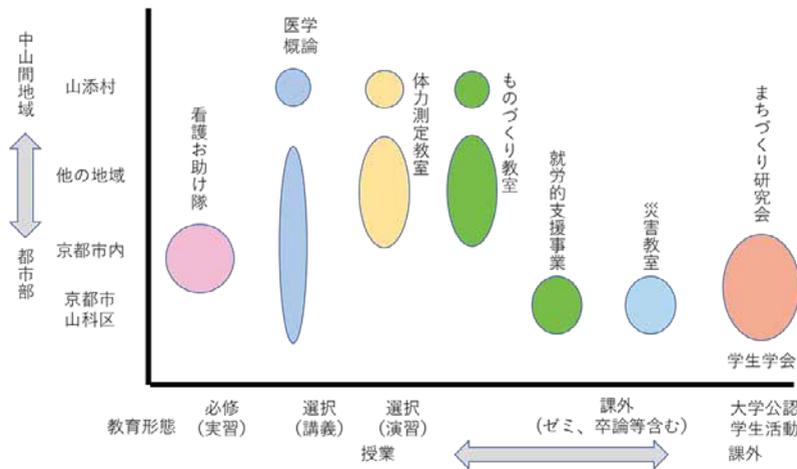


図 3. 事業のワーキングダイアグラム（教育形態 vs 地域的展開）  
 ピンク色：看護学科、ブルー：健康科学部（救急救命学科が主体）、イエロー：理学療法学科、グリーン：作業療法学科、オレンジ：非医療系学部（経営、経済等）の学生による活動を示す

次にそれぞれの教育活動は、目的 2 で明らかになった「地域」性について、本事業では位置づけがなされており、特に、今回の

課題が「どの地域でも」実践可能な“若い世代の参加を促進するマニュアル、というものであり、地域にフォーカスをあてた検証も重要です。それぞれの取り組みについてどの地域をカバーしているかを示したのが図 7-3 です。

縦軸には、大学の地元の京都市山科区での展開を下方に示すとともに、上方に向かって都市部から中山間地域へ展開しています。京都市内から山添村にかけての中間に位置する地域としては、たとえば滋賀県の市街などが含まれます。今回の事業で3つのワーキンググループが中山間地域である奈良県山添村（面積66Km<sup>2</sup>で80%が山林、人口3200人、高齢化率57%）でも展開しました。このような地域の条件では、買い物や受診の移動の困難さもあり、学生とのイベントについては、高齢者にとって特に新鮮であったことがうかがえます。体力測定教室では、コロナ禍の影響を中山間地域の高齢者がより強く受けた可能性が示唆された。立地的に移動がより強く制限されたことが推測されたが、村の関係者との情報交換では、高齢者の移動を学生が担うなどという発想は、学生も支援を受ける高齢者も危険な山道の慣れない移動でリスクにさらすことになるということを指摘されました。また、草深い村の雑草処理に学生が赴くとしても、雑草の処置は熟練も安全性の担保も重要であり、学生を労働力として高齢者支援に使うといった安易な発想を戒められました。こうした多様な方々からの指摘もまた、基礎調査、事例集、大学としての実践を通じて共通項として、「マニュアル」に抽出されています。

## 2)研究事業における新たな高齢者支援の取り組み結果の概要

### 【1】高齢者と若い世代(学生等)とのコミュニケーション -健康科学部授業「医学概論」での取り組み-

京都橘大学 健康学部救急救命学科 平出 敦

#### 研究の概要

医学概論という新しい授業コースを立ち上げ、医療人基礎力の養成のため、医療系の1年生に対して高齢者とのコミュニケーション力を醸成する取り組みを行いました。

その授業の中で、高齢者と学生とのコミュニケーションの問題・課題について検討を行いました。

#### 本調査から得られる効果（仮説）

現在の若い世代（学生等）の多くは、核家族で育ち、日常的には高齢者と接点をもつ機会は少ないというのが現実です。こうした若い世代（学生等）が、どのようにして高齢者との関係を構築していけばよいかという課題は重要です。高齢者は、若い世代（学生等）からみれば指導者や競争相手ではなく、少し離れた立場から応援や受け入れをしてくれる存在であることが想定されます。本調査では、高齢者と若い世代（学生等）の間には補完的な関係性が成立しやすく、お互いの信頼関係のよりどころとなるような円滑で楽しいコミュニケーションの導入は難しくないのではないかという仮説のもとに、調査を行いました。

## 事前準備

### 1. NPO シーズネット京都の皆さんによる授業協力

NPO シーズネット京都は、明るく楽しい老後の人生を主体的に生きていくために、「生きがい作りとネットワークづくり」の中で実践しながら追及している団体です。メンバーの皆さんは、医療系の実習では模擬患者となつていただくなど大学にはしばしば授業の協力者としてお越しいただいています。この団体の高齢者の皆さんに、1年生とのコミュニケーションのために授業にお越しいただきました。

### 2. 学生側の準備

健康科学部 1年生の学生同士でロールプレイをしながらコミュニケーションスキルの基礎を学ぶとともに、身近な高齢者を見つけてコミュニケーションをとるなどの準備をしました。身近な高齢者としては祖母が多いという結果でした。

## 当日の流れ

学生と高齢者がコミュニケーションするチャレンジは、授業時間内に1時間行いました。学生は6人グループで、高齢者の皆さんはそのグループに一人ずつ参画しました。9グループ中、6つのグループで会話を録音しました。

## コミュニケーションの検討

コミュニケーションの内容を文字起こしして、テキストマイニ

ングの手法で発語数について検討してみました。発語がどの程度なされたかは、形態素解析という手法で、発語を意味のある最小単位に分けて評価しました。この手法で、高齢者の発話数、学生の発話数について、その品詞についても検討しました。グループ内で両者が一度に笑った回数も調べて検証しました。会話内の笑いの頻度が高いコミュニケーションは楽しい話し合いになっていましたので、笑いの頻度との比較を行いました。

### **検討からいえること**

高齢者＋学生の発話数（形態素総数）が多いことは、笑いの頻度とは結びついていませんでした。ただし、形態素の種類が多いグループでは、笑いが多いという結果になりました。また使われた名詞の種類が多いことも笑いの頻度に結びついていました。会話のテーマは、自由でしたので、高齢者と学生が自由に内容を展開できたグループは楽しい会話の展開ができたのかもしれませんが。また、形容詞の数が多いグループでは笑いの頻度が高いという結果でした。自然に自分の感情が言葉として発せられている会話は、楽しい会話になっていました。学生が率直に「すごい」「カッコいい」といった言葉が自然に発せられるコミュニケーションは円滑だといえるかもしれません。

### **マニュアルに還元できること**

コミュニケーションは本来、若い世代（学生等）と高齢者が、何らかの共通の目的で作業を行ってこそ意味のあるものかもしれ

ません。しかし、高齢者のニーズの中で、話し相手や、高齢者が **コミュニケーションを求めるニーズは非常に普遍的**です。高齢者のための居場所づくりも多くはコミュニケーションのための場となっています。

この検討の結果は即断できませんが、若い世代（学生等）と高齢者がテーマを決めずにお話をするという設定でも、若い世代(学生等)が **自然に自由に、心に感じたことを短い語句でもよいので、発言できる**雰囲気であれば、自然に楽しいコミュニケーションを実現できるのではないかと思われるものでした。**若い世代（学生等）の心理的安全性の担保**が重要かもしれません。このようなサービスを提供する事業をたちあげている方からのお話でも、一見、コミュニケーションが苦手そうな若い世代（学生等）でも、心理的安全性に配慮すれば高齢者と話をするサービスに対して、決して躊躇はいらぬのではないかということでした。また、コミュニケーションに限りませんが複数の学生が高齢者と会うことは、このような心理的安全性の点からは、悪くないのかもしれませんが。

### **授業後の課外の取り組み**

この授業後、課外の活動として、履修学生の希望をとり、2つの活動を行いました。1つは、中山間地域（奈良県山添村）での高齢者ワクチン接種の支援です。これは、学生が2人一組となり、一人では接種に不安の残る高齢者を迎えに行き、接種後、安全にご自宅まで送り届けるというものです。18人が希望して、宿泊等のキャパシティの関係で7人が参加しました。希望者が多かつ

た理由として、教員がワクチン接種の支援をしているという安心感、2人ずつという安心感、自然豊かな山間地域という魅力、などがあったものと考えています。大学の地元で、独居高齢者に電話をするという取り組みには、応募が一人ありましたが、その後、キャンセルされました。若い世代（学生等）の参加を促進する取り組みとしては、上記の中で、学生たちは定期的な取り組みより、イベント的な取り組みに興味がある可能性もあります。独居高齢者に電話する事業を希望しなかった理由として、定期的な取り組みには、アルバイト等により多忙であるという理由をあげた学生が多くみられました。

## 【2】高齢者の日常生活支援ニーズの把握 –看護学科1.3年生による取り組み–

京都橘大学 看護学部看護学科 深山つかさ

### 研究の概要

高齢者の日常生活の支援ニーズの解決のためには、まずは若い世代（学生等）が高齢者の日常生活の中での困りごとを把握する力が必要です。京都橘大学看護学部では、授業(実習)の一環で、地域在住高齢者と交流する機会を設けています。そのような機会を通して、学生が生活の中で抱える高齢者の困りごとや支援ニーズをどのようにとらえているかを明らかにすることを目的として、1年生と3年生の授業をふりかえりました。

### 高齢者とのかかわりの内容と授業レポート

1年生は老人クラブが開催する体力測定会に3回参加し、高齢者とコミュニケーションしながら体力測定のサポートをしました。そして、体力測定への参加の都度「実習のまなびの自己評価」「学びのレポート」を提出しました。

3年生は6月の土曜日に醍醐中山団地に赴き「看護お助け隊」として依頼のあったご家庭に伺いました。換気扇やふろ場の掃除（天井のカビ取りなども含む）、大型ごみの搬出、網戸の洗浄や電球の交換等の日常生活の困りごとに対する支援を行い、お話をさせていただきました。その後「学びのレポート」を提出しました。

学生から同意を得て、これらのレポートを材料にテキストマイニング分析を行いました。

## 結果の解説

看護学部 1 年生と 3 年生では、高齢者の日常生活の困りごととして捉えた内容が異なっていました。まず、1 年生は、体力測定を通じて高齢者とかかわることから心身機能の変化に注目し、そこから日常生活動作 (ADL) に「時間がかかる」ことや、「耳が聞こえにくい」「膝が痛い」という**日常生活での不自由さを困りごととして捉えやすい**ことがわかりました。この実習の前に、1 年生は座学を通して高齢者の身体、心理、社会的変化や発達課題を学び、それらの変化を高齢者疑似体験を通して学んでいます。実際に体力測定で高齢者と交流する中でも、身体、心理、社会面の変化や、日常生活での不自由さの実際について、少しリアリティをもって理解できたと言えるでしょう。ただ、教員が期待していた、日常生活の困りごとについて、例えば買い物や家事など細かな日常生活にまで想像を広げた理解には至りませんでした。教員が高齢者とのかかわり方や生活の見方についてあらかじめ助言をすることで、もう少し理解が広がった可能性があります。しかし、入学間もない大学生が、半日交流した程度で把握できることには限界もあるとも考えられました。

一方で学年が進み、3 年生でのお助け隊演習を通して自宅を訪問すると「買い物に行けない」「高いところの掃除が大変」「運動や人と交流する機会が少ない」というように、**日常生活の困りごと**

とを具体的に把握できるようになります。そして、どのような支援が必要かというところにまで視野を広げて考える力もつけています。この日常生活の困りごとを解決する一つとして、このお助け隊演習というような存在が重要な役割を果たしているということにも学生は気づいていました。この点では、1年生からの学びや経験をふまえ、3年生でのお助け隊演習で、高齢者の生活の困りごとへの支援を行うという順序性を持ったカリキュラム構成も重要なものであると考えます。

なお、1年生は高齢者の困りごとを十分に把握できませんでしたが、だからと言って生活支援ができないというわけではありません。**看護学部の学生は人のために何かしたいという思いを持った優しい学生も多く、一般の学生としてボランティア活動に参加してもらうことで力を発揮してくれる**ことと思います。また、3年生くらいになるとより深く、日常生活の困りごとへの支援ができるようになっていると考えられるため、多様な学年・経験をもつ学生の参加を募ることが重要だと思えます。

ただ、**カリキュラムに組み込まれた活動の場合、単位や評価などの縛りがあるため、ボランティア精神から生まれる「自分が楽しむ」「喜びを得る」という視点は得にくい**ことはデメリットかもしれない。それはレポートに「対象者が笑顔だった」「対象者が楽しそうだった」という表現は散見されるのですが、自身が「楽しんだ」という表現は見られなかったことから、自ら楽しむことの大切さというところには気づきにくい状況が考えられました。しかし、それを前提として、**高齢者と若い世代（学生等）がお互**

いに教える側、学ぶ側という立場に立つことを取って強みと捉え、高齢者に対しては若い世代（学生等）の特徴について情報提供を行ったり、若い世代（学生等）には、高齢者が一般的に「若者」にどのようなイメージを持ち、どのような振る舞いを期待しているかを説明するなど、**お互いが役割を果たしながら、win-win な活動となるような工夫も必要**だと考えています。なお、1年生のレポートでは「より良い生き方を考える機会となった」「気持ちが救われた」などの記載がありました。このことから本取り組みは、高齢者が一方的に支援を必要とする立場ではなく、高齢者の方々からも学生は叡智を受け取るという win-win な関係を示す活動であると考えます。



図 4. 看護学部カリキュラムラム 学年の目標と実習積み上げイメージ

### 【3】山間部地域の高齢者支援:学生主体の高齢者健康調査の取り組みー健康科学部理学療法学科 3 年生の取り組みー

京都橘大学 健康科学部理学療法学科 村田 伸

#### 研究の概要

本研究は、中山間地域在住の高齢者と若い世代（健康科学部理学療法学科 3 年生）との交流促進、および高齢者の健康支援の一助になることを目的に行いました。

この調査は、2022 年 9 月 12 日～14 日の期間で奈良県山添村の高齢者 60 人と大学生 17 人、大学院生 1 人、引率教員 5 人で行われました。ここでは、健康調査に向けてどのような準備を行ったのか、調査当日の流れから調査終了後にどのような振り返りを行ったのかについて記載します。

#### 本調査から得られる効果（仮説）

参加高齢者は、若い世代（大学生）による健康調査を通して自身の健康状態を客観的に知ることができ、今後の健康の維持・向上に役立てることができると考えました。また 大学生は、健康調査を通して高齢者の身体・認知・精神機能の特徴を知ることができ、高齢者との交流を通して医療人に必要な情意領域の成長を促すことができます。この調査を通して、中山間地域在住高齢者と大学生という、普段交流することのない世代間交流が促進されることを期待します。

## **事前準備**

### **1. 奈良県山添村での調査実施に向けた打ち合わせ**

医療法人正和会野村医院：野村信介院長および山添村保健福祉課：新瀬和恵保健師と 7 月初旬に面会し、調査の趣旨説明や方法などを説明しました。その後は、メール等で準備を進めました。

### **2. 学生のリクルート方法**

健康科学部理学療法学科 3 年生のうち、高齢者の健康支援に興味のある理学療法学科専門コース（ヘルスプロモーションコース）に所属している学生 21 人に希望を取りました。自ら参加を希望した 19 人が対象となりましたが、2 人が調査直前に体調不良により参加が困難となったため、健康科学研究科の大学院生 1 名を追加して、学生 18 人と引率教員 5 人で調査を行うこととなりました。

### **3. 高齢者のリクルート方法**

山添村地域包括支援センターから健康調査のチラシを高齢者に配布して、健康調査の告知をしてもらいました。

### **4. 調査会場の手配**

調査は体力測定を中心に行うため、広いスペースの会場が必要となります。また、中山間地域のため、参加高齢者が集まりやすい場所を確保する必要があります。山添村保健福祉課の手配により、地域の異なる 3 会場で行うこととなりました。

## 5. 調査方法の事前習得

参加学生 17 人を対象に健康調査で行う身体機能検査、認知機能検査、生活機能検査を 7 月から実施練習を行いました。身体機能検査としては、身体組成、握力、柔軟性（長座体前屈距離）、下肢筋力（30 秒椅子立ち上がりテスト）、歩行能力（Timed Up & Go Test）、立位バランス（開眼片足立ち保持時間）などを中心に実施します。認知機能検査は、国際的に普及している認知症のスクリーニング検査である Mini-Mental State Examination を選択しました。生活機能の評価は、基本チェックリストを採用しました。

事前練習は、それぞれの測定内容・目的・方法などを教員が説明・指導し、学生が主体的に定期的な練習を行いました。調査実施前の 8 月末には、理学療法学科 4 回生を模擬高齢者に見立てた測定会のデモンストレーションを行って、当日の調査に臨みました。

### 測定会当日の流れ

測定会は、午前（10:00～12:00）と午後（13:00～15:00）の 2 部制で行われ、学生が中心に測定会を実施しました。高齢者が来場したらまず、血圧・脈拍、体調のチェックを行い、実施説明や注意点などを説明しました。その後、身体計測や体力測定、認知機能検査や生活機能検査などの質問紙調査を実施しました。

### 調査結果

参加した高齢者は、3 日間で 60 人であり、その内訳は 70 代が

最も多く（63%）、性別では女性が63%を占めました。参加高齢者の体力は、男女ともに俊敏性や歩行能力の指標とした Timed Up & Go Test（椅子からの立ち上がりと歩行の組み合わせテスト）、下肢筋力の指標とした30秒間の椅子立ち上がりテストが全国平均値を上回り、身体の柔軟性の指標である長座体前屈距離と立位バランスの指標とした片足立ち保持時間は全国平均値を下回りました。このことから、転倒しやすい高齢者が多いことが予測されます。実際、過去1年間の転倒歴調査では、25%が転倒（全国調査：10～20%）を経験しており、転倒予防の取り組みの必要性が示されました。

本調査で特筆すべき点は、参加者高齢者の認知機能です。認知症の疑いがある高齢者は10%、認知症予備軍とされる軽度認知障害のある高齢者は43%、よって認知機能に問題が認められる高齢者は計53%（全国調査：認知症15%、軽度認知障害13%）に上り、認知症の疑いなしと判定された高齢者47%を上回っています。この理由は明らかにできませんが、基本チェックリストの判定結果を見ると、閉じこもり傾向とうつ傾向に該当する高齢者がともに27.3%と多いことから、COVID-19の影響で社会とのつながりが希薄となった可能性が考えられます。様々な活動をとおして積極的に高齢者の社会参加を促す必要があるのかもしれない。

### **健康調査実施後の取り組み**

調査実施後には、山添村保健福祉課に提出する健康調査報告書を学生が中心となって作成しました。参加高齢者の体力について

は年齢別全国平均値と比較し、統計解析なども含めて、A4 サイズ 31 ページの報告書を作成し福祉課に提出しました。

## **取り組みの成果**

参加した高齢者からは、「若い学生と触れ合うことで生き生きとできた」、「自身の体力や体組成、認知機能を知ることができた」、「運動や食事など、健康により気を配ろうと思った」などの声が数多く聞かれました。今回の若い世代（大学生）による健康調査を通して、高齢者自身の健康状態を客観的に知ることができ、健康への関心が高まったことが推察されました。大学生は、健康調査を通して高齢者の身体・認知・精神機能の特徴を実感できたようです。今回、医療職を目指す学生にとって、健康調査を通して高齢者と交流できたことは、ヒトの健康を支える専門職としての自覚と責任を再確認できたと思われます。また地域包括支援センターには、保健福祉課に提出した調査報告書と個別の測定データが、より効果的に地域高齢者の健康支援対策に利用していただけることを願っています。

## 取り組みの成果

### 高齢者

- ・若い学生と触れ合うことで生き生きとできた。
- ・自身の体力や体組成、認知機能を知ることができた。
- ・運動や食事など、健康により気を配ろうと思った。

### 学 生

- ・高齢者と触れ合うことで優しい気持ちになれた。
- ・各種測定方法を分かり易く伝える方法を学べた。
- ・高齢者の方が思ったより元気なことが分かった。

### 地域包括支援センター

- ・地域高齢者の体力や認知機能の特徴が知れる。
- ・健康面での支援が必要な高齢者をピックアップできる
- ・地域高齢者の効果的な健康支援法戦略の一助となる。

図 5. 学生主体の高齢者健康調査の成果

## 【4】高齢者と若い世代の交流のあり方 ―物作り、体操、食品ロス問題、就労的活動などを通して―

京都橘大学 健康科学部作業療法学科 小川敬之・原田瞬

### 研究の概要

今回の調査（実践）は、高齢化の進んだ団地や NPO 法人等が実施するコミュニティにおいて多世代交流を行い、学生がサポートする中で高齢者が主体的に行える活動を提供し、自立（自律）性を喚起する取り組みの実践報告です。また、今回は社会的課題とも言える食品ロスにも関わる機会を設け、学生が地域住民や高齢者と直に触れ合う過程において、それぞれが抱える課題（高齢者独居、食品破棄、貧困、家庭環境など）を机上ではなく、実体験として考える機会にすることを目的に行いました。

高齢者にとっては、様々な活動の機会が提供される中、主体的に社会参加する機会となり、学生にとっては社会課題の実際や高齢者との接し方など、その実態を肌で感じ取る機会になりました。特に将来医療職になる学生にとっては、教科書では学ぶことのできない社会課題の現実、高齢者との関わり方を知る機会になったと考えられます。また、3年生の講義（地域包括ケアシステム演習）の一環として実施したことは、継続性のある地域介入として実践されていくことが予測できました。

### ①『D 団地での多世代交流 ―大学講義の一環として―』

団地住民の健康意識は高く、また若年者との交流には初め戸惑いもあったようですが、すぐに打ち解け積極的に関わるようになっていました。また、健康に対する意識は高いが、自分の健康度を定期的に知る手段が乏しいことがわかりました。血圧や血糖値など簡易に計測できるものは、例えばコンビニなどでも計測できるようにすることで、市民の健康意識の向上や外に出てくる機会にもなるのではないかと思われました。

また、今回食品ロスへの取り組みとして、食品配給を行ったが、これまでイベントに参加していなかった方や男性が多く取りに来られ、その後イベントに参加するきっかけになる方もいました。社会参加を促す切り口は様々であり、人が何によって行動を起こそうとするかも様々ですが、「食す」「喜ぶ」「働く」そして「若い力」などは高齢であっても孤立していても、人の心を動かし、体を動かすきっかけになるのではないかと思われます。

以下、イベントに参加してくれた高齢者と学生たちの声の一部を紹介します。

#### 【団地の方達の声（一部）】

- ・ 久しぶりに笑った
- ・ 若い人とのやり取りでこっちも元気になる
- ・ 初めは何を話してよいかわからなかったが、一生懸命関わってくれたのでよかった
- ・ エネルギーをもらった。感謝。

- ・ 次が楽しみです
- ・ 健康診断をたくさんしてほしい

### 【学生の声（一部）】

- ・ 楽しんでもらえて自分たちも嬉しかった
- ・ 高齢者の人とあまり喋ったことがなかったが、自分でもきちんとコミュニケーションが取れることがわかってよかった
- ・ 物作りや体操など、高齢者に合わせたものをもっと工夫ができると思う
- ・ 自分の知らないこと（地域のことやその地域の歴史など）がたくさんあり、楽しく話げできた
- ・ 初め何を話してよいか戸惑ったが、優しくしてもらい嬉しかった

## ②『就労的活動を通した多世代交流 — 一軒家(F 邸)での取り組み—』

京都市右京区嵯峨野にある一軒家（以下 F 邸）では、コミュニティカフェの運営や企業と連携して高齢者の就労的活動を展開しており、また多世代交流を目的とした、おもちゃ病院の開催や地域住民とものづくり教室などを定期的に行っています。京都橘大学の学生や京都芸術大学の学生などが活動の手伝いや物作りを一緒に行う中で、高齢者の元気が促進されています。おもちゃ病院のボランティアスタッフと学生、おもちゃを修理に来たこどもたちと交流している場面です。壊れたおもちゃがその場で治ってい

く様と子どもたちのキラキラとした表情とのマッチングがとても印象的です。自分が手を動かし、働くことで誰かが喜ぶ、自分の「出番」があるということは大切に思われます。自分ができることを人のために提供できることで元気になる人はたくさんおられるはずです。それは年齢に関係なく、高齢者も若い世代も同じだと考えます。そうした出番がある「舞台」を構築していくことも大切な取り組みです。

### ③本事業における取り組み成果の意義

今回の事業で印象的だったのが、高齢者も若い世代とどのように接すれば良いのかという戸惑いがあるということでした。コミュニティがあっても、双方でどのように関われば良いのか不安を抱えた状態であれば、そもそもそのコミュニティに足を運ぶことさえ少なくなってくることが考えられます。しかし、様々な世代が集まっても、ものを作ることや食事をするのは活動そのものの濃淡はあれ、共通するところが多くあります。そうした媒介物（イベント）を活用し、世代間の交流の場を持つ、そして共通の活動を行う中で双方の思いや置かれている状況を深く理解していきます。その過程を踏むことで、高齢者は機能が低下しており、支えるべき人というステレオタイプ的な見方ではなく、双方でできないことを補い、できることで相手をサポートするという地域共生社会への進展へと繋がっていくものだと感じました。

## **【5】高齢者の創造性を刺激する 一ものづくり教室を通じた高齢者と作業療法学科3.4年生の世代間交流ー**

京都橘大学 健康科学部 作業療法学科 佐川佳南枝

### **<対象>**

若い世代（学生等）：作業療法学科（3，4年生）

高齢者：NPO 法人シーズネット京都の高齢者、山添村の高齢者

### **<プロジェクトの概要>**

#### **高齢者のヘルスプロモーションとしてものづくり教室を開始**

作業療法学科では、ものづくりを通して仲間づくりや生き生きとしたライフスタイルをつくってもらおうというヘルスプロモーションプログラムを2018年の学科開設時より継続してきました。作業療法士の職域は広く、病院や施設で疾患や障害をもった人たちのリハビリテーションにあたりると同時に地域でも介護予防やヘルスプロモーションに関わっています。参加の中心はシニアが作るシニアのためのNPO法人、シーズネット京都の会員です。同団体とは、健康づくりに大学側が協力し、シーズネット側は研究に協力するという関係性を当初より築いてきました。当初は、高齢者と学生が協力して大学祭で販売する商品について企画、制作し、販売したところ、完売するなど、高齢者と学生の交流が活発化していきました。

## コロナを機にオンラインものづくり教室へ

2020年、新型コロナウイルス拡大の影響で一時休止を余儀なくされます。しかしアンケートをとったところ「人と関わるのが減った」「楽しいと思うことが減った」が半数以上を占めたことから、2021年1月から「オンラインものづくり教室」として、Zoomを利用した形で開催することとしました。オンラインでの開始当初は、つながらない、音声がでないなど様々なトラブルがありましたが、高齢者たちも少しずつ操作に慣れ、これまでに「苔玉」「バスボム」「石鹸」「スノードーム」など様々な作品を作成してきました。作業療法学科の学生も参加し、オンラインものづくり教室を卒業研究の対象にしている学生もいます。2022年の春からは教員にかわり学生が講師役となって、どのように説明するとオンラインでも伝わりやすいかを試行錯誤していますが、参加高齢者からは好評を得ています。高齢者が発案者となり講師役となる回もあり、少しずつ主導権を高齢者にわたしていけたらと考えています。また参加高齢者たちはZoomにも慣れ、自分たちで「万葉集の会」などZoomを使って主催する方も出てICTを使いこなせるようになってきました。

またコロナの状況下では、実習に行けずに学内実習となる学生も多くいましたが、オンラインで模擬患者役を担ってもらうなど、たいへん助けていただきました。これらの経験から作業療法学科のみでなく他学科の授業においても模擬患者役を担っていただくようになりました。また、卒業研究にも積極的に協力していただいています。

## 山添村と京都をつなぐハイブリッドものづくり教室

そんな中、今年度は奈良県山添村で高齢者対象のものづくり教室を行うことが企画されました。山添村ではスマホを使いこなす高齢者は少なく、災害時のためにも ICT に関心をもつ高齢者が増えればということで、2022年11月と2013年1月は、山添村の公民館とオンラインものづくり教室メンバーの京都の自宅をオンラインでつなぐというハイブリッド形式で行いました。大学からは作業療法学科の3回生が、それぞれ8名と5名参加しました。山添村の高齢者からは「なかなか若い人と会う機会がないけれど、孫のような大学生にやさしく教えてもらえて楽しいひと時だった」「京都の方たちとも交流できてよかった」「また是非やってほしい」と大好評でした。学生は、普段の学生同士のような言葉ではうまく伝わらないことを実感したり、どのように説明したらうまく伝わるのかを意識するなど年代の違う人たちとのコミュニケーションの取り方について学んだようでした。これから始まる実習にも生かしていきたいと話していました。また「作ったペンダントを見せ合いながら楽しそうに会話しておられる様子を見てやりがいを感じた」、「前回一緒に作ったハーバリウムをストラップにしてかばんにつけているのを『これ見て!』とうれしそうに見せてくれた方がいて本当にやってよかったと思った。達成感を感じた」、「ものづくりの時は高齢者の方々が全員いきいきしており自分も楽しかった」などと語っていました。

## **若い世代（学生）と高齢者の世代間交流の実践の取り組みからえたこと**

この取り組みには、「学生との交流」と「ものづくり」という二つの要素が入っています。高齢者は、学生との交流そのものも楽しく、パワーをもらうものと喜ばれます。また、ものづくりは楽しい活動ですし、作ったものが残りますので、高齢者もやりがいを感じ、作業をすると生き活きとされます。高齢者と学生との交流は、一方的に学生が作業を教えたりケアしたりの関係性ではなく、高齢者からも様々なことを学ぶ互恵の機会となっているということが、今回の調査でよくわかりました。

## **当該学科で学ぶ学生の特徴（つよみやよわみ）、教員の支援**

この取り組みの弱みとしては、時間がないことがあげられるかと思えます。医療系の学生は、解剖、生理学、運動学等の学習に1, 2年生では時間を要し、また3年生からは卒業研究や実習が待っています。しかし対人援助職になるうえで、実際に世代の違う方たちとコミュニケーションしたり、一緒にものづくりをすることは、作業療法士となるうえで得難い学びになります。私たちの支援としては、自分たちの調査研究や学生の卒業研究のなかで短い時間を利用して学生が高齢者と交流できる機会をタイミングをみながら作っていくことが大切だと感じています。私たちは高齢者の健康づくりに貢献し、高齢者からは私たちの研究（卒業研究含め）に協力していただけるという互恵的な関係性が築けることが重要ではないかと考えます。

## 全国の若い世代(学生等)による高齢者新の取り組み紹介

マルティネス真喜子

若い世代（学生等）との交流により高齢者の生活をさらに実質的に支援する試みが数多く模索されるようになってきました。ただし、こうした試みには、継続性を中心に問題や課題があることも認識されており、系統的な検証は不十分な状況です。

そこで、日本各地で展開されている若者と高齢者の世代間交流の先駆的な事例を収集し、継続のコツ、しかけ作りの工夫などを共有するためこの事例集を作成しました。

各事例は、それぞれの地域の特性に合わせて展開されているため、どの地域でもそのまま活用できるわけではないかもしれませんが、魅力的な活動やしかけ作りのアイデアがたくさん詰まっています。地域で支え合う仕組みを構築する際に、また高齢者の生活支援や介護予防の基盤整備を検討する際に、これらの事例を参考にさせていただき、若者を味方につけることも是非考慮に入れていただけるとよいのではないのでしょうか。

### 事例について

全国で先駆的な取り組みをされている全 12 事例を挙げています。若者と高齢者の世代間交流の機会は、交流時間の長さを軸にすると、大きく 4 つのパターンに分類できます。異世代が同じエリアに住まい、日常生活に密着したかたちをとる「密着型」、日常生活の中で異世代が顔を合わせる場を提供する「居場所提供型」、高齢

者の困りごとに若者が駆けつけて問題を解決する「駆けつけ型」、祭りや催しを開催することで世代間交流を深める「イベント型」です。多くは型を組み合わせる活動を展開しています。

また、活動の設置母体も様々です。若者が大学生であることが多いため、大学が母体となることが多いですが、大学の中でも社会連携課などの事務課が連携窓口になる場合もあれば、授業担当の教員や、サークルの監督が中心となっているなど様々です。また、市役所等の行政が直接かかわる場合もあれば、第3セクターの機関が柔軟に活動を展開している例も多く見られます。このように、12事例からも様々な組織が有効にネットワークを活用する地域連携（産官学民）の実態が明らかとなっています。

そして、「ボランティア＝無償」という概念を覆す、サービスの担い手となる若者への報酬が提供できるシステムを運営する事例も複数ありました。より良い地域社会を創生すべく、若者が起業しソーシャルビジネスを運営することで、継続性を生み、世代間交流が日常生活に溶け込んでいる様子がうかがえました。

表 1. 事例一覧

	事例	設置母体	報酬
密着型 + イベント型	事例1: 神奈川大学サッカー部 『竹山団地プロジェクト』	大学(サークル)・NPO	
	事例2: 神奈川県住宅供給公社 『大学との連携による団地再生』	公共事業所	有償
	事例3: 北海道札幌市+北星学園大学 『もみじ台団地プロジェクト』	市役所+大学(社会連携課)	
	事例4: 認定NPO法人 街ing本郷 『書生生活』	認定NPO法人	
居場所提供型 + イベント型	事例5: 一般社団法人 えんがお 『高齢者と若者の居場所』	社団法人	
	事例6: 豊中社会福祉協議会 『豊中あぐり』	社会福祉協議会	
駆けつけ型	事例7: 社会福祉法人 ゆうゆう 『学生と高齢者をつなぐ地域活動』	社会福祉法人	有償
	事例8: 株式会社Liberty Gate 『アシスタ-高齢者と若者のマッチング-』	株式会社	有償
	事例9: 千葉商科大学 『高齢者を対象とした生活支援サービスのマネジメントシステム構築』	大学(有志学生)	有償
	事例10: 岡山県立大学 『学生サークルTAMAGO;手作り弁当プロジェクト』	大学(サークル)	
イベント型	事例11: 名寄市立大学 『おばあちゃんが伝えたい手作りレシピ』	大学(授業)	
	事例12: Community Nurse Company 株式会社 『地域おせっかい会議』	株式会社	

## 密着型+イベント型の事例

このスタイルでは、大学生が主に団地やコミュニティに住み、高齢者を含む住民と生活を共にします。ここには、地域の高齢化、空き家の増加によるコミュニティの弱体化といった課題が存在し、地域活性化、若いプレイヤーの必要性、空き家の利活用といったニーズが認められます。このような地域のニーズを充たすべく学生にとっても地域にとっても Win+Win の世代間交流がもたらされる仕組みが求められます。

### 【学生にとっての Win】

学生は空き室や空きアパートに格安の家賃で住めると同時に、地域活動に参加することもできます。団地や地域の高齢者と顔な

じみになり、声をかけられる関係性が築かれます。

高齢者との交流からやりがい、達成感、楽しさといった感情を得られ、ライフスキルが向上します。居住地域が研究フィールドとなり、卒論などを書きあげることができる場合もあります。また、就職活動の際、地域活動実績を履歴書に書いてアピールすることもできます。

地域の高齢者に見守られながら学生生活を過ごす学生は、市役所や児童相談所など地域で活躍できる職に就くことも多いようです。このように、学生の主体性は地域で育てられ、人としての成長を促されているとも言えます。

#### 【高齢者や地域にとっての Win】

団地や地域に学生が住むことで明るさを取り戻したように感じられるようです。高齢者は若者から元気もらい、高齢者自身の潜在能力が引き出されます。また、若者と共に健康増進や介護予防の活動に取り組める機会が得られます。



事例3：もみじ台団地に住む学生

## 居場所提供型＋イベント型の事例

このスタイルでは、高齢者をはじめ、地域の人々が集える居場所を提供し、イベント開催も行いながら交流の機会をつくります。主に地域に暮らす高齢者の孤立の予防と解消が目指されます。しかし、孤立するのは高齢者だけではなく不登校や社会になじめない若者も同様です。世代の垣根を越えた居場所がやさしく住みやすい地域を作っていきます。

事例5では、若者が中心となって居場所を提供しています。この場の運営に参加する学生は自主的に活動に加わります。また、ここに訪れる高齢者はなにかしらの役割を担っています。自分に自信を持ってない若者は、この場で高齢者と関わり、感謝の言葉もらうことで自信をつけていきます。このような場があることで、自然な交流が生まれ、お互いが認められ、それが当たり前の景色である、そんなまちができていくようです。



事例5：一般社団法人えんがおのコミュニティハウスみんなの家

事例6では、高齢者が中心となった居場所です。特に定年退職後の男性が活動の中心となって農園を運営しています。ここでは活動メンバーに役割と出番が用意されています。運営主体は社会福祉協議会で、イベント企画の提案や、活動のサポート、農業の6次産業化にまで発展させる支援をしています。また、不登校の学生や、家庭環境に恵まれない児童を巻き込み、活動が展開されます。地域に暮らす異世代の住民がつながり合い、認め合い、支え合うことが目指されています。

### **駆けつけ型+イベント型の事例**

このスタイルでは、地域の高齢者の困りごとや不便に対し、若者が駆けつけて解消します。

一見、高齢者が若者に支えられている構図に見えがちですが、若者が高齢者と関わることで楽しみを見いだしたり、成長につながっており、実は“育てられている”という側面が大きいことがわかります。若者は、特別な専門性を持っていなくても自分には役に立てることがある、喜んでもらえることができると感じられる経験をし、成長を実感します。そしてこのような活動は、若者にとって、やらされてやるものではなく、自己犠牲を強いられるものでもなく、社会的課題の解決に自発的に取り組まれているものであり、楽しんで行われているものであることが特徴的です。そして、ここでも高齢者と若者がWin+Winの世代間交流がもたらさ

れる仕組みが求められます。



事例 9：千葉商科大学の活動

### イベント型の事例

このスタイルでは、催しが企画され、その場に高齢者と若者が集い、楽しみながら課題の解決や後世に残したい作品の制作を行います。お祭りなどの地域行事もこのスタイルですが、ここで挙げられた事例は、単なる交流にとどまらず、大変ユニークです。事例 11 では、住民が自分達のまちを自分たちの手でもっとよくしたい、という声をどんどん拾ってアイデアを出し合い、実現していきます。高齢者も若者も、専門家でなくても自分の持つ専門性を発揮してまちを元気にしていく企画が展開されています。

事例 12 では、授業の一環として、大学生と地域の高齢女性が後世に残していきたいレシピのレシピ集を作成します。これは、お互いの強みを発揮し、協働するイベントでもあります。レシピ作

成を通して、大学生は高齢者の知恵や技術に触れ、多くを学ぶこととなり、高齢者は孫のような学生と交流でき、自身の知恵やわざが言語化され形になるのを確認します。



事例 12：「おせっかい会議」

### これからの地域における世代間交流の展開

これらの事例から、高齢者と若者の世代間交流には幅広い世代が関わっていることがわかります。特に活動を運営していくうえでのキーマン（コーディネーターとなる存在）は中年層です。また、地域のステークホルダーがしっかり連携をとっていることもわかります。

これからの展開として、高齢化が進む地域においては、地域包括ケアシステムの中に、積極的に若者を組み入れていくことが考えられます。学生が世代間交流を通して地域貢献活動ができる環

境を整えていくことで、地域の活性化だけでなく、学生が成長できる場が整っていくことにもなります。若者の希望が地域の希望となりえることを念頭に置き、それぞれの地域の特性を生かして産官学民が連携し、より良い仕組みを構築していくことが望まれます。

## 事例からわかった世代間交流継続のポイント

世代間交流の継続のポイントとして、6つの要素を抽出しました。

### 1. つなぐ (コーディネート ・ マッチング)

地域の様々な人々や機関をつなぐコーディネーターが存在し、この存在が大変重要であること。コーディネーターの存在とその後継者の養成が継続のカギになる。

### 2. 経営 (マネジメント)

経済的基盤を構築すること。サービス提供者が有償で活動することも可能。

### 3. 場 (社会的インフラ)

地域にもっと居場所をつくる（社会インフラを充実させる）ことで、高齢者や若者の孤立の課題が解決していく可能性がある。

### 4. 楽しむ (エンジョイ)

「楽しくないと続かない」。若者も高齢者も楽しんで活動するこ

とが継続には不可欠である。

## 5. 個 (インディビジュアル)

地域で暮らす個人が尊重され、高齢者も若者も、互いに個と個がつながっていくことで絆が生まれ、安全で安心な生活がもたらされる。

## 6. 地域創生 (コミュニティデザイン)

自分たちがどんな地域で暮らしたいのか、高齢者になるのが楽しみになるような社会を想像し、創生できることが重要。



図 1(再掲). 事例からわかった世代間交流継続のポイント

高齢者と若者の関係を支援される者と支援する者という構図でとらえることは、もうないでしょう。高齢者と若者の関係は、未来への希望を生む、可能性に満ちたものです。

世代間交流の継続の 6 つのポイントが結晶の形を構成しています。結晶はカラフルで、明るい未来を印象づけます。

中心部分は空白ですが、各地域の特性に応じたポイントを埋め込んでいただくと地域オリジナルの未来を創造していけると考えています。

### 3)生活支援コーディネーター、社会福祉協議会等の情報

#### 介護予防・日常生活支援総合事業がわかる資料

厚生労働省「総合事業（介護予防・日常生活支援総合事業）」  
（厚生労働省ホームページ） <<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000192992.html>>（参照日 2023-2-28）

#### 生活支援コーディネーターの役割がわかる資料

厚生労働省「生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）に係る中央研修テキスト」（厚生労働省ホームページ） <<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000084710.html>>（参照日 2023-2-28）

#### 社会福祉協議会（社協）がわかる資料

社会福祉法人 全国社会福祉協議会「ふれあいネットワーク」  
（全国社会福祉協議会ホームページ） <<https://www.shakyo.or.jp/index.html>>（参照日 2023-2-28）

高齢者の交流・生活支援の取り組みを進める上では、市区町村社会福祉協議会（市区町村社協）が、最も身近な相談の場となります。活動拠点の自治体の社協に相談しましょう。

地域のボランティアと協力し、高齢者や障害者、子育て中の親子が気軽に集える「サロン活動」を進めているほか、社協のボランティアセンターではボランティア活動に関する相談や活動先の

紹介、また、小中高校における福祉教育の支援等、地域の福祉活動の拠点としての役割を果たしています。

社協は地域のさまざまな社会資源とのネットワークを有しており、多くの人びととの協働を通じて地域の最前線で活動しています。(全国社会福祉協議会ホームページより)

## 8. おわりに

このマニュアルは、令和4年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業「若い世代（学生等）による高齢者の生活支援に関する調査研究事業」において作成されたものです。作成にあたり、可能な限り汎用化・一般化を目指しました。

マニュアルのご活用にあたっては、すでに地域で構築されているネットワークや、活動している人的資源等との連携をはかり、ご活用いただければ幸いです。

（事業担当者の一人として 征矢野あや子）

メンバー

代表者

平出 敦 京都橘大学健康科学部救急救命学科・教授

学内委員

松本 賢哉 京都橘大学看護学部看護学科・教授

村田 伸 京都橘大学健康科学部理学療法学科・教授

小川 敬之 京都橘大学健康科学部作業療法学科・教授

佐川 佳南枝 京都橘大学健康科学部作業療法学科・教授

深山 つかさ 京都橘大学看護学部看護学科・准教授

征矢野 あや子 京都橘大学看護学部看護学科・教授

関根 和弘 京都橘大学健康科学部救急救命学科・教授

マルティネス 元 京都橘大学看護学部看護学科・准教授

真喜子

学外委員

梅谷 進康 桃山学院大学社会学部ソーシャルデザイン  
学科・教授

片木 孝治 株式会社応用芸術研究所 代表取締役所長

山本 勤 NPO 法人シーズネット京都 事務局

兼田 光太郎 社会福祉法人京都市山科区社会福祉協議会  
山科区地域支え合い活動創出 CD

先駆的事例集以外の取材協力者

山本 智一 株式会社 whicker 代表取締役  
京都大学大学院理学研究科・大学院生

大田 雅之 京都橘大学経営学部経営学科・助教

令和4年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業  
若い世代（学生等）による高齢者の生活支援に関する調査研究事業

**若い世代(学生等)のためのこれからの高齢者生活支援マニュアル**  
**～生活支援コーディネーター、教育機関教員のみなさま必携～**

---

令和5（2023）年3月

発行 学校法人京都橘学園 京都橘大学

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町3-4

TEL 075-571-1111（代表）